



# 報 特 攻

平成3年7月

## 第13号

〒102 (新)  
 東京都千代田区九段南  
 4-3-7 (勸借行社内)  
 特攻隊慰霊顕彰会  
 特攻平和観音奉賛会  
 電話 03 (3263) 0851

編集人 田 中 賢 一  
 発行人 最 上 貞 雄

### 祭 文

謹みて特別攻撃隊殉国烈士の御霊に申し上げます。  
 我が国運を賭けて戦った大東亜戦争に於て、未曾有の国難打開のため、幾多の肉弾戦が実行されるや、皆様方には、当時弱冠十七、八歳から二十歳代の春秋に富む年齢であられながら、最愛の肉親への恩愛を断ち切り、進んで特別攻撃隊員となられて、身命を祖国に捧げられ一片の肉片すら残すことなく散華されました。その誠忠遺烈により、全軍将兵の闘魂烈々として燃え上り、又国を挙げて総ての国民が感泣したのであります。しかして、遂に終戦を迎え、それから四十五年を経た今日、日本が空前の復興発展を遂げたことは、英霊のご加護によることとであり、私どもとしましては、少しでもそれに報ゆる為に、祖国日本を今後ともしっかりと守り続けることを肝に銘じ、愈々精進を重ねて参りますことを、ここにあらためてお誓いいたします。

本日第十三回特攻隊合同慰霊祭にあたり、御遺族はじめ関係有志ここに相集い、在天の英霊に対しまして、心から敬弔の誠を捧げます。

何とぞ今後とも英霊が安らかにおわしませんことを。  
 平成三年三月二十四日

特攻隊慰霊顕彰会

会 長 竹田 恒徳

例年春に靖國神社で行うことになっている我が会の行事、今回は3月24日に挙行した。本年は余寒酷しく、九段の桜はまだ綻びがうかがえない。この慰霊祭、特別に案内を差出すことなく、会報の一隅に予告として掲載することになっているが、年々歳々参会

者がふえ、本年は五〇〇名に及んだ。しかし、一方では熱心な会員でこの一年間に物故された方も少くなく、この会を如何に存続させるか、考えねばならないときに来ている。なお、欠席で玉串料を送金された方約六〇〇名おられ、ここにお礼申し上げます。



参集所に溢れる参会者

竹田会長

献吟

吟 石橋 一歌  
笛 佐伯しづか

森 忠司 作

君思う ただひとすしの 心もて

神しろしめせと 吾は征く

久保田 鑑 作

今は亡き 戦友の御魂よ 安らげく

鎮まりませる 靖国の森



特攻戦士の像奉納



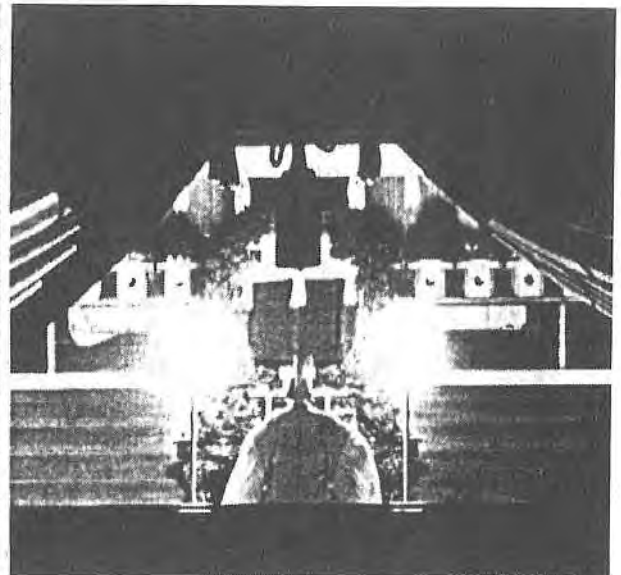
当日慰霊祭に先立ち、午前11時より特撮3期木下己貴彦画伯作製の特攻戦士の胸像の奉納除幕式が行われた。

この像は木下己貴彦氏が多額の玉串料を添えて特攻隊慰霊顕彰会に寄贈され、竹田会長からそのまま靖国神社に奉納した。従って靖国神社から会に、会から木下氏にそれぞれ感謝状が贈呈された。

これによって遊就館内特攻展示室内に飾られている像は二体になった。

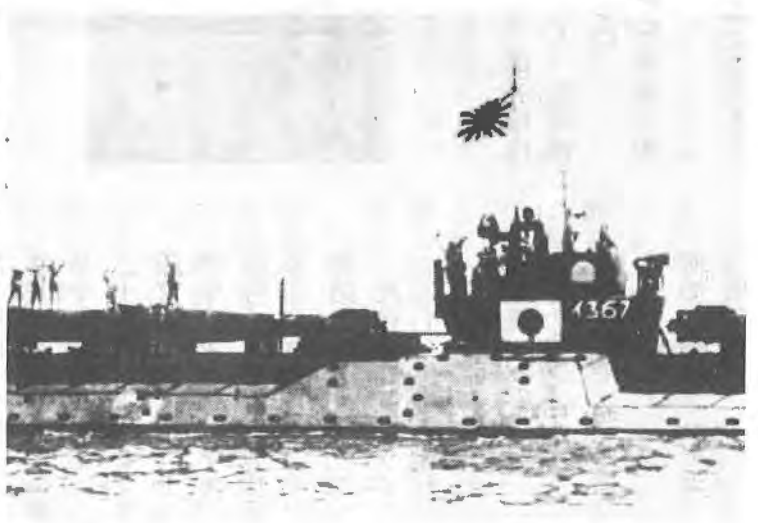


竹田会長と木下画伯一家



全国特攻隊戦死者合慰霊祭

庭の梢で咲いて会おと  
 語りしところ雲遙か  
 澄み通りたる目差しは  
 炎となりて砕けたり  
 宮居にひびく柏手は  
 み霊を呼ぶかほの暗き  
 灯かすかにまたたきて  
 幽明の境消えんとす  
 萌ゆるが如き春草の  
 君が面影変らねど  
 老醜の身は秋たけて  
 四十余年の夢遠し



# 特攻隊員の死生観

## —義烈空挺隊員について—

田中賢一

サイパン攻撃部隊に指定され豊岡で訓練を始めてから、沖繩に突入玉砕するまで半年余り、その間目標が消滅すること二回、その上出撃が延期されること数回に及んだ。3独飛については、人員の入替りについて詳かでない点もあるが、奥山隊に至っては当初の一三六名が最後まで変ることなく、全員沖繩に向けて出撃した。

この間に、この人達が抱いていた死生観とはどのようなものだったろうか。

そもそも、特攻隊員の死生観というような重大な問題を、その立場になかった者が軽々に論述するなど、まことにおこがましい次第である。ついては、私見は一切加えることなく、遺書など私が収集した資料によって、窺い知ろうと思う。

先ず奥山隊長について。

前年11月に特攻隊長に指名され、郷里の津市におる母に初めて打明けたのは、3月9日付の手紙である。この手

紙には〇〇隊長を命

ぜられたと言ひ、特攻隊とは言い切つていない。この時点はサイパン行きが取り止めとなり、唐瀬原に帰つていたとき

で、遺書というよりも母親から度々契められていた縁談の断りのような手紙だった。その後西筑波に移つて、硫黄島攻撃準備中にもう一度手紙を出している。二回目の手紙は初めの手紙よりももう少しはっきりと、死を決してゐることを表現している。その手紙の末尾には、

私物梱包は留守部隊より送り返される筈ですが、内容は全然整理してありません。直敷お願いします。と結んでゐるあたり、母にそれとなく別れを告げているように思える。その手紙は鉛筆書きで、さり気ない挨拶状を装つたという感じもする。

ところが、沖繩に向けての出撃を明日に控えた五月二十二日付のものは、遺書と銘打つて巻紙に毛筆で堂々と書いてある。その中の一節に次のような言がある。

幼年学校入校以来十二年諸上司の御訓誡も今日の為のように思はれます 必成以て御恩の万分の

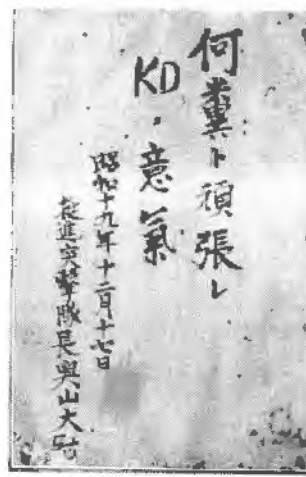
一に報ゆる覚悟であります

奥山が幼年学校入校以来と言つてゐるが、このことは強く意識してゐたらしい。豊岡で訓練中の19年12月17日という日付で、何葉ト頑張レKDノ意気”と大書したものが残つてゐる。KDとはカデット即ち将校生徒の意。硫黄島に前進できず悶々としてゐるときに、俺は幼年学校出身でそのため今日まで生きてゐるのだから構はないが、何で所帯持ちの部下まで連れてゆかねばならないのか”と言つたと伝えられてゐる。

順序不同ではあるが、ほかの人について述べる。

渡辺裕輔少尉は中野学校二俣分校出身、諜報要員として加つた人。御両親様と宛名して書き残した中に、

我々は必ず任務を完遂します。私の墓は先祖代々の墓より大きく



しないで下さい——と言つてゐる。

阿部忠秋少尉も同じく中野学校出身、遺書といつても裏半紙に鉛筆でなぐり書きしてある。

御両親様

忠秋ハ本日敵飛行場ニ斬込ミマス 生前ハ何一ツモ出来ズ申訳アリマセン

リツ高坊ニハ呉々モ宜シク御伝ヘ下サイ

祖父母様ニモ宜シク御伝ヘ下サイ 其レカラ私物梱包一個軍刀一振送

リマス承知下サイ

二十四歳デ玉碎シマス 任官以来御世話ニナツタ方モ沢山

アリマスガ略シマス 面白イ話モ沢山アリマスガ略シマス

附記

死後ノ処置ニツイテ

イ 金銭貸借ナシ

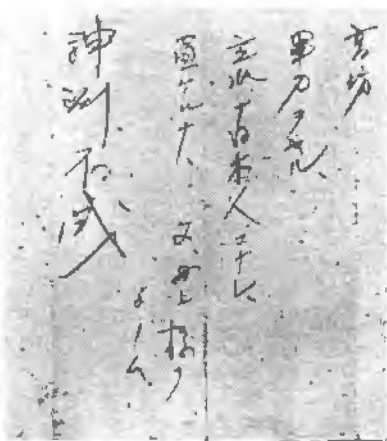
口 婦人関係ナシ

リツチャン 必勝ヲ信ジ

後ニ続クモノヲ確信シ 今ヨリ征ク 何モ出来ズスマナカッタ 元氣デ暮セ



高坊  
軍刀ヲヤル  
立派ナ日本人ニナレ  
負ケルナ 父母様ヲタノム  
神州不滅



酒井敏夫少尉は3独飛の操縦者、特操一期出身、父宛の遺書にいう、

——敏夫は父上様に生前何も子としての務めを果さず先立つ事をおゆるし下さい。然し、陛下の御為に死するをもって忠節即ち孝なりと信じ立派に戦って散る覚悟です。散るに先立って敏夫の気持は日本晴に爽やかで何の悔も未練もありません——

青井輝行中尉は3独飛の航法主任、幹部候補生出身。

——只今より沖繩決戦場に馳せ参じます。悠久の大義に生くる秋こそ、今この秋を措いて再来せず、男児の本懐これに過ぐるなし。生

前の数々の不孝を深くお詫致しませす。十七時熊本飛行場より——

渡部利夫大尉は奥山隊副隊長、陸士55期である。この人の遺書らしいものは見当たらないが、1月17日付弟に宛てた手紙が残っている。

——兄は今日B-29基地たるサイパンを攻撃せんとす 断じて一名たりとも残さず殲滅せん 而してサイパンの土となり永久に米鬼を咬み殺さんとす——

町田一郎大尉は3独飛の操縦者、陸士56期、サイパン攻撃を準備しているとき、両親宛の手紙がある。

——戦局正に凄烈神州の興亡を決するの日近きに在り、一人の一郎を生かし、一族の町田を生かして皇国の敗戦を如何とするや。敢然起ちて以て三千年の御鴻恩に報ゆるのみに御座候

幸にして重大光榮古今に絶する大命を拜し唯々感泣措くところを知らざる体に御座候 死生観等全然念頭に無之唯々任務の完遂を期し居り候——

宇都木五郎中尉は奥山隊小隊長、幹部候補生出身、妻宛に遺書という標題で毛筆個条書き、達筆である。

一、分家スルニ当リ生活諸物件(家、土地)ハ兄ノ思召シニテ

満足スルコト

このような書き出しで八個条認めてある。家憲書の古文書を見るようである。なお、付記として、残置する私物の品目を書き連ね、右品目中軍服、長靴、軍刀等は子供のため一点宛最上のものを残し、そのほかは兄に渡せと指示している。

東郷勝曹長は奥山隊の分隊長、婿養子にいつて新藤と改姓したが、東郷曹長と書いてあるノートが残っている。その中から、

可愛い妹弥生ちゃんへ  
兄さん兄さんとあれほど慕ってくれたのに 何等兄らしいことも出来ず

御国のため再び南海の戦場に行きます お母さんやお姉さんのおしえをよく守って 一生けん命お勉強して立派な人になって下さい  
そして お母さんに孝行なさい  
睦ちゃんと仲よくね  
兄さんも弥生ちゃんのお勉強に負けないよう 手柄を立てて ラジオにてお伝えします それを楽しみに待ちなさいね

この文章は、サイパン攻撃の準備中に書いたものらしい。この人は多情多感、ノートにはB-29に対する憤怒の言葉やわが心情などが、断片的に書き

連ねてある。その中から歌一首、

還り来ぬ身にしあれども父母に告げずに行かんやまと男子は

伊藤警軍曹は奥山隊第4小隊の一員、陸軍野紙に認め、留守部隊に引継ぐ私物箱の中に入れてあった。日付は沖繩攻撃の内示を受けた五月五日になっている。

——かほるが念願の日が遂に來ました。本當にこの日をどんなにか待っていたか知れませんか。御母様、かほるの氣持を汲み取ってきつと喜んで下さい。

咲いた花なら散らねばなりません。立派な花を咲かせて御覽に入れます——

関三郎軍曹は奥山隊第一小隊の一員、遺髪と遺爪を同封して次のように書き残した。

——大命降下勇躍征途に就きます。今迄の重々の不孝は何卒御許し下さい。いさぎよく散る覚悟です。何も思い残すことはありません。

よしや身は千々に散るとも來る春に

また咲き出でん靖国の宮  
これ以外に遺書は見付からなかったが、寄書きなどに多くの詩歌が残っている。

奥山道郎

天皇の御盾となり死なむ身の

心は常にたのしかりけり

渡部利夫

かねてより祈りしときに今会いて

心の中ぞうれしかりける

うれしさを何にたとえん武夫の

御垣の守と散る機に会いて

身を殺し大和心に生きんとき

胡塵や如何で清め得ざらん

九重の清きさやけき御空おぼ

乱せる米鬼いかで生かさん

町田一郎

あらはさん秋は来にけり丈夫が

ときしつるぎの清き光を

宇津木五郎

いかならん事に会いてもたゆまぬ

は

わがしきしまのやまとだまし

骨は砕け肉は散るとも魂魄は

すめらみくにを永久に守らん

梶原哲巳

魁けて梅とわが身は散りゆかば

後に続かん桜花かな

渡辺裕輔

かずならぬみ山に咲きし若桜

君が御為に散るぞうれしき

棟方哲三

君が代はちよよろずよといく春も

匂ひ忘るな若桜花

原田宜章

天皇の皇祚護りて征く道は

永久の世迄も何朽ちるべき

新藤 勝

身はたとえ南の島に朽ちるとも

永久に護らん神州の空

尾身勢二

武夫の散りてうれしきこよいかな

神風吹かん大和しまねに

征くも残るも皆桜

時こそ違え散る花

三浦歳一郎

大君の御楯となりて南暎の

華と散る身ぞ樂しかりける

今村美好

奥山に名もなき花と咲きたれど

散りてこの世に香りとどめん

しきしまの大和男子ぞわれもまた

大君のため散るぞうれしき

諏訪部忠一

家訓

尊也日東国 享生感激極

青雲入武窓 鍛錬抜山力

敵父慙懃辞 祖來家訓垂

死鳥忠義鬼 無後護皇基

渡辺裕輔

絶 忠

恋闕至情是赤心

尊王大義是臣道

磅礴天地宇内間

唯有神州不滅氣

ここに掲げた詩歌の多くは日付がな

いので、サイパンを目指していた頃か

ら、最後は健軍の三角兵舎に入ってから

のものまであろう。そして最後に到達した心境を、3独飛の小林真吾少尉

は

夢中求平正

と書き残し、新妻幸雄少尉は

待つ有りて

眺むる月の

涼しさよ

と言ひ残している。

出撃の数時間前に、中野学校出身の

棟方哲三少尉は新聞記者を呼びとめて

言った。この人は入富前小学校で教鞭

をとっていた。

「私の今生の願は、もし叶うこと

なら、私の今の気持を私の教え子、

いや全国の学童に一言伝えて行き

たいと思うのですが、それは叶は

ぬことですので、ここに書き留め

ておきました」と言って手渡した

紙片には、

全国ノ学童ニ奇ス

義烈空挺隊 棟方少尉

俺が行ク!!

俺ガヤル!!

俺ニ続ケ!!

コノ意気デ進メ コノ意気デ勝テ

最後に敢えて私見を言はせてもらえ

ば、サイパンを目指して猛訓練を重ね

ていた頃は、激しい敵愾心に支えられ

ていた。それが半歳に及ぶ失意、緊張

の繰返しの末に到達した心境は、花と

散るといふ美意識と、後に続く者があ

るといふ価値観にあったのだと、言ひ

残し書き残したものを見聞し、私は窃

かに思っている。不時着して生き残っ

た人達の迷懐もそれを裏付けている。

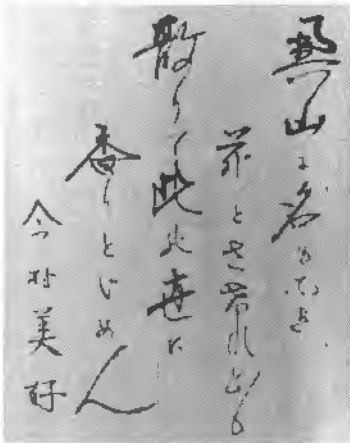
あゝ義烈空挺隊

一、南陲の空 雲荒れて

悲報は引くや櫛のごと

菊水の旗 いく度か

わが陣頭に 翻えり



松実留五郎

その名床しき健軍に  
 出撃の陣 整いぬ  
 われ育みし 故郷よ  
 栄あれ永久にいざさらば  
 二、人生僅か 五十年  
 下天のうちを比ぶれば  
 夢まぼろしと人は言う  
 その半にて散るとても  
 見果てぬ夢に変わりなし  
 今こそ征かん美しく  
 後継ぐ人に言伝て、  
 我に継げや 若人よ  
 三、奥山諏訪部の両雄は  
 笑をたゝえつ手を握り  
 心に残るくまもなし  
 今日この為に我等皆  
 春撩乱の 花の日も  
 秋蕭条の 月の夜も  
 鋭心磨き 一すじに  
 武夫の道 歩み来し  
 四、金峯山に 沈む陽に  
 うち連れ帰るとも鴉  
 幼き思い 今絶ちて  
 爆音消ゆる西の果て  
 雲間に漏るゝ月三更  
 奥山ついた 突入す  
 唯一言の 無線にて  
 永久に絆はと絶たり  
 五、北飛行場 異変あり  
 着陸するな退避せよ



何を書くや出撃前夜



敵の電波は乱れ飛び  
 阿修羅の如き活躍に  
 応じて立てり特攻機  
 若き命は燃ゆるとも  
 天地懸河の 大勢を  
 止むる術は既になし  
 六、「待つありて眺むる月の涼しさ」と  
 詠いし人よ今いづこ  
 ハイビスカスの花紅く  
 平和の姿よみがえる  
 四十余年のうつろいを  
 見つめる人の面影は  
 久遠の若さ保ちあり  
 若人 義烈空挺隊  
 あ、義烈空挺隊

### 全陸軍航空部隊碑

#### 第十五回碑前祭

航空碑奉賛会の行う碑前祭は、本年は幹候出身者の担当で、4月12日に行はれた。天候に恵まれ、遅咲きの桜がまだ残る花曇りのうちに、遺族、来賓、会員合せて、約五〇〇名の参集があつて盛会だつた。

全陸軍航空部隊碑は、勿論特攻隊だけをお祭りしたものではないが、主碑の両側にある円筒型の副碑に刻まれた二、一〇四の部隊名の中には、次の通り多数の特攻隊が含まれている。



献花の列

〔比島に散華した特攻隊〕 二〇隊  
 〔沖縄に散華した特攻隊〕 一〇八隊  
 〔南方戦線に散華した特攻隊〕 五隊  
 〔本土附近で散華した特攻隊〕 六隊  
 〔満州で散華した特攻隊〕 二隊  
 〔各地に待機中の特攻隊〕 三三三隊

# 特攻「誠」隊、挫折の記

宇野 禄

陸軍少年飛行兵第十五期生・当時19才

## 遺書は「断」と一字のみ

昭和二十年三月十日陸軍記念日の朝八時、台湾人小学校の校庭で記念式を終り宿舎で一服している時。生徒時代から苦業を共にしてきた、同期の松原が、部屋に入るやいなや、私の肩を叩いて、

「オイ宇野、特攻の命令が下った。立派に死んでくれ」と涙ぐんだ。私はびっくりして

「おい、本当か?」「うん」  
「いま本部の前に巻紙ではり出してあったよ」

本部までは七トメートル程しかなかった。私は飛行靴をつっかけて夢中で走った。途中召集兵が立止まって私に敬礼する。中には私の顔をまともにみないで下を向いたまま通り過ぎてゆく兵隊もいる。

「こりゃほんとだわい」

私は胸を張って男らしいところを見せようと、こんどはゆっくり歩き出した。本部前の人だかりがしていた。私

が、行くとサッと

道をあけてくれた。本当に十二人

の同期生の名が墨

痕鮮やかに書き出してあった。「誠」

以来の仲間だ。私はすぐに本部に入っ

た。人事係の准尉がツカツカと歩みよってきて、

「宇野これに遺書を書いてくれ」  
差し出されたのは白い封筒であつた。中にハンカチ一枚があつた。その

日から私たちは町の旅館に収容させられ、各人個室に入れられた。訓練は夕方一回だけ行なわれることとなつた。毎日やってくる主計大尉は、「明日は何が食べたいか」と注文を聞きにきてくれたが別に、食べたいものは何もなかった。ただ死ぬ前に一度親父に会いたい、親父は特別に子煩悩で幼いころから私を可愛がってくれたからな——

と思った。旅館の窓から南十字星を眺めながら、ふとそんなことを思い出したがそれはとても無理なことであつた。私の生命は旦夕にせまっている。或る日部隊長が別れの会食をやってくれた。隣席の将校が「宇野君。何か家族に伝えることがあれば、私が聞いておくが……」

と親切にいつてくれた。「いや何も

いうことありません」と私はハッキリ

言った。

特攻隊はやがて台北に前進を命ぜられた。部隊総員、国防婦人会、女学生

たちが、飛行場に見送りにきてくれた。私は胸を張って堂々と出発しよう

と、そういう態度で機上の人となつた。この基地へ還ることは、もうなかるう。ゆっくりと、離陸の動作を行

なつた。横目で見ると、全員が手に手に日の丸や帽子を打ち振っていた。

飛行場上空で編隊を整えた十二機の「隼」は左右に翼をふりながら見送りの人たちに別れを告げて、一路台北飛行場へと向つた。所要時間約一時間で、台北に着陸。ただちに車で郊外にある北投温泉に向かった。この温泉旅館は、出撃する特攻隊員の出入が激しく、私たちはその数回目にあたつてい

た。宿舎では毎日羊羹七本、煙草七箱ずつが支給された。七の数字は、今にして思えば、ラッキーセブンの意味だったのだろうか——毎日の日課は夕刻になると飛行場へ行き高度二千米トルから突入降下訓練を四、五回程やるだけであつた。町を散歩すると、在留邦人をはじめ台湾人までが丁寧なおじぎをした。私は何故か肩が凝る思い

で町の散歩は止めてしまひ部屋に閉じ

こもつて大抵ひとりて武士道正宗とい

う酒を飲んでた。この時くらい酒を

うまいと感じたことはない。明鏡止水

というが、私はそのとき歳十九であつた。遺書を書くために渡されたハンカ

ちに、私が記した文字は「断」の一字であつた。故山本五十六元帥が愛用していた字だ。「いつでも出撃できるよ

うに、準備をしておくこと」と、作戦参謀から指示があつたが私は毎晩酒をのんだ。「よし俺は出撃の時は、二合

ビンを一本持つて行こう。沖縄へ突入する十分ほど前に一ぱい飲んでから死ぬのう」と真剣になつて考えた。このよ

うな宿舎生活を私たちは送つていたが、特攻機はほとんど毎日のように払

暁、または薄暮に出撃していった。そのため、いつの間にか、私はこの宿舎では最古参の一人になつてしまった。

「7度こそ俺の番だ」と思いながらも私たちに対する出撃命令は一向にこなかつた。  
四月三日遂に出撃命令が来た。払暁

二時、私は、先輩山田曹長によびおこされた。

「宇野、頼む」

私は飛びおきた。洗面所へ行くことや

はり出撃隊の中浦伍長が歯を磨いてい

た。死ぬのに歯をみがく必要があるだ



ろうかと、ふと私はそんなことを考えたりした。部屋に帰ると、最後の膳が出ていた。しかもかねて宿のお内儀に頼んでおいた私の大好きなオムレツが皿にのっていた。

### 生還は許されぬ

飛行場に着くと、薄やみの中に特攻十二機が整然と並び、すでにプロペラがまわされていた。私の気持はびりりと引きしまった。作戦参謀より「沖繩までの視界は大変悪いが、今までの訓練の成果を揚げてくれ、目標は在泊の敵艦船、しっかり頼むぞ」という簡単な指示があった。居並ぶ将兵の中に師団参謀長、岸本大佐、海軍の航空参謀らの顔もあった。その時、暗闇の中から突然黄旗をたてた将官が着き、中から降りた人がいた。台湾軍参謀副長、西村敏雄少将であった。私が比島にいるころ、山下大将の下で、かつて参謀副長や、飛行団長をされた純粹の航空出身者であった。マニラから飛び立つ特攻機と一緒に見送ったり、何度か一緒に酒食を共にしていたので顔なじみだ。

私に駆けよって敬礼した。

「宇野伍長、御成功を祈ります」

少将はハッキリいって私の手を握った。私は目頭が熱くなるのを感じた。

慈父とも仰ぐ西村少将とも永久のお別れだ。台湾へ来てから少将は、特攻隊の見送りには、全然顔を出していない。「私のためにわざわざ見送りに来て下さったのか」と思うと嬉し涙がホロリと頬を伝った。泣いてはいけな。今まで泣いて出撃した特攻隊員が一人でもいたか。と自分で自分に言い聞かせて、にじみ出る涙をこらえた。白い布を張ったテーブルに最後の酒がくばられた。西村少将は一升ビンを持って私のそばにやって来て私の好きな酒を湯呑み茶わんに、なみなみとついでくれた。

「閣下、私は必ず命中してみせます」

「うーん頼むぞ」  
ふと前方をみると、炊事の井田一等兵が、私に何かいいたい様子で、立つている。

「井田こっちへ来い」

飛行場大隊のこの兵は作業服のまま私のもとへ来た。

「宇野班長、私は前からいいたかったのですが、戦艦を沈めて青い眼の奴等を三千人も引きつれて、竜宮の乙姫様に会いに行くんですから、男としてこんな立派な仕事はありませんよ」

「井田、俺は立派にやってみせるぞ」召集の井田一等兵は涙ぐんでそれ

以上一言もしゃべれない。「出撃」最後の敬礼をして、「貴様と俺とは同期の桜」の合唱に送られて、私たち十二名はゆっくりと愛機に向かった。皆泣いて歌っている。私は夢中で機上の人となった。いよいよ離陸の合図だ。さうらば、故国よ、父よ、友よ、部隊長よ、さようなら——これで永久のお別れだ。「総員帽振れ」「万才」と「爆音」のどよめきの中を十二機は砂けむりを上げて一機また一機と離陸していった。がちり編隊を組んで、編隊長の合図で十二機は一斉に翼を振った。私はもう一度、今飛び立ったばかりの飛行場を見ようと座席から乗り出した。一団となった見送りの人たちは



われわれを見上げて日の丸の旗や、帽子をちぎれんばかりに振っていた。「よし必ず命中するぞ、そして後に続く者を信じよう」と最後の誓いを立てた。二五〇キロ爆弾を抱えた編隊は飛行場上空を一周し暁暗の沖繩へ機首を向けた。二十分も飛んだころ視界不良のため中隊の編隊行動は無理と判断した編隊長は、「小隊編隊に移れ」と電話してきた。三〇小隊四機ずつ小隊長の判断と合図で突入しようというのだ。さらに十二分を過ぎたころ、天候はさらに悪化して視界は全く不良になり四機の編隊さえ確認が困難になった。層雲の峰々の間をさまようように縫いながら飛ぶが、雲の移動は飛行機より速く、しかも多い。そして、さらに十五分も飛んだころ、小隊の僚機は全く見えなくなってしまう。訓練のときは雲中飛行は絶対禁止されていた。何故なら当時の飛行機ではパイロットにとって、雲こそ悪魔のような存在であり、雲中に突っこんだため有能なパイロットが事故死したことを私は知っていた。

こうなっては私は単機沖繩上空に出て突入するよりほかはない。いったい桃園から出る誘導戦闘機と、命中を空中写真に撮影する任務を持った百式偵偵はどうしているのか。誘導機は台湾

北岸を離れたころ、西方千メートル上空に一度チラッと見たが……。二五〇キロの爆弾を抱いた「隼」は足が遅い。しかし何としてでも命中せねばならぬ。送ってくれた基地の人々にも、

否、一億国民のためにも、と雲中飛行の私は全く複雑な心境で心ざびしいような気がしたが、とにかく体当たりするより方法がない。その決心をふたたび確認してみた。特攻隊の生還は許されていないのだ。時間を計算すると基地を出発してから、もうとっくに一時間三十分たっていた。すでに沖繩上空にきている時刻だ。私はぐっと高度を下げ雲の下に出ようとしたが、雲量はますます多く、海上を視ることさえ出来なかった。いったい俺はどうすればよいか、という気持で私はレバーを入れてまた高度をとった。数分してレシーバーに入る声があった。「特攻機、視界不良、基地に帰還せよ」その声は三回くりかえされた。

### 反転基地に向かう

やむを得ず、私は反転して機首を台湾に向けた。すると「特攻機、特攻機、誘導機に続け」と再び指令があった。ふと左に誘導の四式戦二機の姿が見えた。地獄で仏とは、このことである。すでに危険な雲中飛行が一時間も

続いていたのだ。私はほっとして、誘導機の後につづいた。いつしか宮古島上空に出ていた。

つづいて「台北帰還無理なれば宮古島に着陸せよ」緊張した声がレシーバーにひびく、やがて右翼の下に宮古島飛行場がチラッとみえた。しかも「隼」が二機、すでに滑走路に休んでいた。仲間だ。帰るのは俺だけじゃない、「ヤレヤレ」と私は胸をなで下した。しかし基地（台北）へ帰ったら、幕僚、部隊長以下が何というであろうか。意気地なし、卑怯者。貴様、それでも軍人か、少年飛行兵の伝統を汚す奴、と先輩たちがどなりはしないか。などと考えているうちに、私の機は基地上空にきていた。

ここまでくれば目をつぶっても帰れるぞと思うと次第に元気づいてきた。だが基地の人々はどんな目で私を見るだろう。比島はともかく台湾より出撃した特攻機の帰還は、まだ前例がなかった。さらに比島と台湾では、兵隊の気質がぜんぜん違っていたので怖かった。ついに私は台北飛行場の上空にさしかかっていた。

「先に着陸せよ」

誘導機からの無電で私は着陸のため、大きく迂回した二五〇キロ爆弾をつんでいるから、果してうまく着陸出

来るかどうか、脚を折って、みんなの前で赤恥をかきはしないか、心配したが降下滑走をずっと長くしてどうやら、着陸出来た。指揮所の前を通ると、何だか私を見る皆の眼が違っている。

「何んだ帰ってきたのか」

そんな眼を皆がしているような気がした。整備員の誘導で準備線で止め機から下りた。昔の助教、浦田准尉が駆けてきた。私が敬礼すると「うんよく帰ってきた。ゆっくり休め」と両腕で私を抱いてくれた。この時までこらえていた私の眼からせきを切ったように涙がドットあふれ出た。「泣く奴があるか、指揮所で報告しろ」准尉の声にうながされた私は、「視界不良のため敵艦を発見出来ずただいま帰りました」と、大声で報告すると、隊長は、「御苦労であった、ゆっくり休ませよ」と暖かい言葉をかけてくれた。先輩同期の者もよりそってきてやさしくいたわってくれた。宿舎へ帰った私は人の情に一晩中むせび泣いて夜を明かした。

降りついた特攻機三機、宮古島に不時着したものの二機あとの八機は悪天候のため海に突入したことが後で判った。何と私は悪運の強い男か、やがて私たち五人は原隊復帰となり、それぞ

れの戦隊へと別れて行った。

その後まもなく、私は四回目のマラリヤにおかされていた。八月九日ソ連が参戦したため、私の戦隊は軽爆隊を護衛して満州に転進することになったが、連日四十度の熱にうなされていた私は気はあせっても、熱が引かぬまま、遂に十五日の終戦を迎えてしまったのであった。



# 少年特攻隊員千田孝正少尉を 見送った二女性・四十五年振 りの墓前の再開

この記事は、千田少尉の郷里、愛知県丹羽郡扶桑町南定松の機関紙に載っていたものを、我が会の会員吾孫子徹男氏が本会報にふさわしい記事として推選されたものである。

先の大戦末期、満州の錦州市（中国遼寧省）の飛行場で少年特攻隊員を見送った二人の女性が、その壮烈な最後を四十五年ぶりに知り、昨年九月十六日、南定松の実家（千田敏男さん）を訪れ、墓に眠る少年兵と再会された。

敵艦に体当たりする死の任務を遂げ、「我が法名には（純）を忘れない様に願ふ」の遺書を残していた。

錦州からの出撃を同家に伝えたこの女性からの手紙も見つかった。

昭和二十年五月二十七日早朝、薩摩半島の万世飛行場から第72振武隊十二機が飛び立った。一機も帰還しなかった。

豊田副武連合艦隊司令長官の感状では沖繩沖で「艦種不詳一隻ヲ行動不能ニ陥ラシメ」る戦果をたたえている。

六番機が千田孝正  
伍長。十八歳だっ  
た。

千田さんは高雄  
尋常小学校を卒業  
し川崎航空機に入

社、その後宇都宮航空学校に志願し陸軍少年飛行兵十五期生になった。旧満洲で特攻隊に加わり、二十年四月錦州航空廠で出撃に備えていたその春、仲子朝江さん（東京都江東区亀戸三丁目）在住と田辺功子さん（三重県安芸郡河芸町東千里）在住は十七歳で錦州高等女学校を卒業、同航空廠に就職した。通勤バスで千田伍長らと乗り合せ沖繩特攻作戦への出撃前であることを知った。

二人は同僚らを誘いホテルで一晩住まいの少年兵らを慰問した。隊歌も覚えた。最後に寄せ書きもした。別れの日はすぐ来た。しかし滑走路までは行けなかった仲子さんは忠魂碑の前で旗竿につけた日の丸を打ち振った。田辺さんは自宅から見送った。千田伍長らの塔乗機は翼を振ってこたえた。仲子さんは千田伍長を兄のように慕い何本もの日の丸鉢巻きを贈った。二、三通の手紙もきた。一諸に撮った写真とも戦時天井に隠したまま引揚げた。

四十五年が流れ彼女等が少年特攻兵

らについて手掛りを得る機会はなかった。昨年五月鹿児島県指宿市で錦州高等女学校の同窓会が開かれ、仲子さんも参加した。「知覧特攻平和館」を訪れたかったからだ。「もしかしたら」の期待通り頭に焼き付いていた千田伍長の写真を見付けた。しかし悲しい結末も確認した。

昨年九月十五日京都で関東軍航空廠戦友会で仲子さんと田辺さんが落ち合い、翌十六日南定松の実家千田敏男さん宅を訪れた。遺書に添い「純光院挺道義烈居士」と刻まれた墓に線香を手向けた。「久しぶりでございます会いに来ましたよ」と声をかけた。遺品なども見せて貰った。満洲で見送ったあと千田伍長の父親にあてた手紙が出てきた。仲子さんは「どうかご安心ください、お元気で行かれました。私に鏡を形見に下さいました」また田辺さん

のものには「お別れするのに断腸の思いです」と書いてあった。これが昨年のコミュニケーションのトップニュースです。

故千田孝正少尉は沖繩沖で散華されたが、尾北地方からただ一人十九歳の特攻隊員であった。

高雄尋常小学校で孝正少尉を教えた酒向先生（亀井京一先生）は昭和五十七年教え児の鎮魂の旅を思い立ち長兄

の敏男氏とともに、遙か九州の地を訪れた。その時の記録の一部も抜すいして御紹介させて頂く。

九州の地には孝正少尉最後の出発を見届けた人々が老いたとはいえまだ残っておられた。彼らはわれわれの訪れを歓迎し、あの当時のことを報告することが、大事な宿願であったかのよう

に、勢いこんで打ち語るののである。昭和二十年五月二十五日九州佐賀の目達原飛行場、陸軍特別攻撃隊七十二振武隊（佐藤睦男中尉を隊長とする少年飛行兵で編成された。その中に千田孝正伍長も入っていた）の十二機が沖繩突入の基地鹿児島県加世田町（加世田市）にある万世飛行場へ向け飛び立っていった。地上で見送る兵隊や付近の人々は飛行機が小さな点となって消えていくまで手にした日の丸をうち



第72振武隊が目達原の宿舎を出るとき

振ってやまない。

十代の紅顔の若者たちが飛行帽の上  
に日の丸の白鉢巻をきりりと巻き真新  
らしい飛行服に真白なマフラーを首に  
巻いて、やはり興奮と緊張でかたい体  
をまぎらすように精いっぱい笑顔をつ  
くつて、慌ただしく飛び去っていつ  
た。今の別れに胸がはち切れる思い  
だった。あの笑顔あの若い肉体が数日  
後、沖繩で敵艦とともにさく裂するの  
かと思うと悲しみとともに、いいよ  
うのない感情の炎がいまも燃え上が  
りますと福山芳子さんが語って呉れま  
した。福山さんは、もう八十余の老婆  
であるが彼女は当時四十余歳、次男が  
海軍航空隊で戦死された直後だったの  
で、彼等少年飛行兵たちがみんな自分  
の息子のように思えてならなかったと  
云う。それも息子と同じように、やが  
ては玉砕する命であると思うと何かし  
てやらなければ気がすまなかった。た  
またま当地の神社で武運長久祈願の式  
に七十二振武隊の五人の隊員を見か  
け、わが家へ伴って帰り、とっておき  
のビールをふるまった。この五人は日  
達原に滞在した一週間ほど、ほとんど

のように思うとまで言った。そしてこ  
の世の最後の思い出にこの母に思い切  
り甘えたかったであろう「お母さんお  
母さん」と、その膝を枕にして寝そ  
べったり、この母にもたれるようにし  
て食事をしたとも言った。彼はギッ  
チョコであったが普段はそれをかくして  
いたが、芳子さんのそばで食事をする  
ときは箸を左手でもっていた「お母さ  
んのそばだからいいでしょう」とも  
言っていた。福山さんの娘静さんは女  
子挺身隊で近所の工場に働いていたが  
静さんにも「お姉さんお姉さん」と  
慕っていた。五月二十五日飛行場を出  
発する時間が早くなった事をきき、母  
娘は自転車相乗りしてかけつけたが、  
既に一番機は上空に飛び去っていた。  
芳子さんは途中から静さん一人に自転  
車で走らせた。やっと孝正君の出生に  
間に会った。姉さんに「お母さんはお  
母さんはまだか」と待っていた孝正君  
の顔を現在も憶い出している。二番機  
三番機と飛び去っていく飛行機に芳子  
さんは路傍からただ手をうち振るのみ  
であった。

特攻隊七十二振武隊は万世飛行場に  
全機到着した。ここは最後の出撃場所  
で飛行機は松林の中に隠し整備兵が全  
力で機体を点検し突入への万全を図っ  
た。隊員は五キロ程離れた加世田町の  
飛龍荘という旅館に休んだ。そして二  
日間休息し二十七日朝五時に沖繩沖に  
向い出撃していった。  
万世飛行場について僅か二日間この  
残された時間に彼等にそれぞれこの世  
に残す心のありたけを筆に托して書き  
残した。  
孝正明日愈々出陣、七時半空母突入  
の予定であります。差備として出撃い  
たします。もう二十三時明日は零時に  
起きなきゃならぬ。月の明りで書く字  
がはつきり読めないためこんなになり  
ました。  
御両親様、皆様の健闘を祈ります。  
福山さんのところへ行って下さい。遺  
品も置いてありますから  
月の明かりに  
吾必沈 明日早朝出撃孝正の本懐こ  
れに過ぎるものなし  
必沈を期す、明日の出撃のため今晚  
は早く失礼いたします  
兄上達によるしく  
見よ孝正のうでを  
飛龍荘の麗子さんに写真を送って  
やって下さい

吾が願い 酒のみで  
我必沈確実なり  
快なるや我が体当り  
見よ沖繩の空と海を  
我が法名には  
「純」を忘れないよう願う「ああ悲  
しいかな」は必要なし  
何も悲しいわけは一つもない  
唯 喜びで一杯なり  
それから我々の遺骨だなんて無い  
我が身のものは遣しません ……  
……  
と延々と書き最後に七十二振武隊と書  
いている。  
飛龍荘の女将山下ソヨさんも今夜は  
どうしても寝ることが出来ないので庭  
に出てこみ上げる激情をなだめている  
ところへ千田孝正が寄ってきた。彼  
は「貴女達はよいね——このきれいな  
夜空も今夜が見納めだが……故郷のオ  
フクロたちはどうしているかナ」と  
ひとりごとのようにいってじっと夜空  
を見つめていた。  
ソヨさんは何と云う言葉もなく黙っ  
てうなづく頬に流れる涙を押さえる  
ことが出来なかった。  
(菊林七郎氏「よろずよ」に一六〇  
頁記載)  
明くれば五月二十七日この日はかっ  
ての白露戦役に日本海軍が日本海洋上

御両親様

千田 孝正

つづいて彼は巻紙に次のような心の  
思いを書きながっている。

必沈 轟沈又轟沈





右端が千田伍長

でロシアの東洋バルチック艦隊を全滅させた輝かしい海軍記念日である。  
この日に出撃するのは、彼等にとって生涯のよいはなむけであったとも云える。

永遠の殉国の旅に……

この日沖繩南方洋上の敵機動部隊の艦船に突入した特攻機は七十二振武隊十二機（うち二機帰還）六六戦隊の二機、戦果として発表されたのは空母二、戦艦二、船種不詳一隻轟沈外多数艦船を撃破であった。

宮本軍曹の手紙

千田父上様  
私は千田孝正少尉殿と最後迄一緒に居りました宮本軍曹と申す者でございます。

孝正少尉殿は二十年五月二十七日朝、沖繩沖に向って進発、敵空母を海底深くほうむり去ると共に、護国の華と散られました。私は機付で飛行機が行くところ常に少尉殿の後席に同乗し、整備に当たっていた者です。大きな爆弾を抱いて最後の離陸をする寸前「家よろしく便りを願います」と申さりました。（中略）

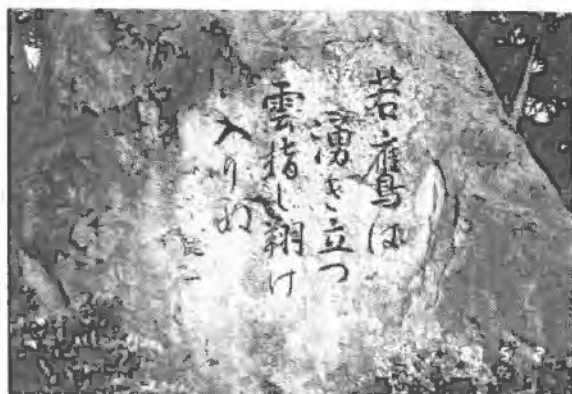
五時五分前「始動」の号令で私の回す発動機は快調の爆音をたてると、千田少尉に操縦桿をわたしました。車輪止は外されました。孝正少尉はにっこり笑って私に敬礼しました。するすると滑り出す愛機、残念だ。いつもなら千田君と共に空の人となるのに。残念だ。

（中略）

学校の先生やその他の人に千田君の最後をたたえていただきたいと存じます。



万世の慰霊碑



# 伏竜部隊の訓練と反省

平山茂男

(元八十一突撃隊特攻長 兵六十八期)

## 伏竜部隊創設の概要

1 昭和二〇年八月上旬を期し、横鎮に七十一、呉鎮に八十一、佐鎮に九十一突撃隊の各伏竜隊を新設するため、五月下旬各鎮にて創設準備に取り掛った。

2 各突撃隊は米軍の上陸予想海岸である相模湾及び九十九里浜に七十一、四国高知海岸に八十一、志布志湾に九十一、突撃隊がそれぞれ展開の予定であった。

3 特攻要員は主として飛行予科練習生を充て、各突撃隊は、特攻隊員八〇〇名(一〇大隊、三〇中隊、九〇小隊編成)及び支援隊員をもって編成する。

4 昭和二十年八月五日各突撃隊は発足したが、実戦に至ることなく八月十五日の終戦により解散した。

## 八十一突撃隊創設準備

1 私(昭和二十年五月十五日付で日向高射長を命ぜられたが、着任早々

八十一突撃隊司令

が発令されるまで、暫定的に準備委員長を命ぜられていた日向艦長から、特攻長予定者として準備に掛るよう指示された。

2 五月二十五日甲種予科練習生十名)小隊長予定者(予備学生出身九名)が着任した。

3 宿舎は、情島西海岸の特殊内火艇格納庫及び兵学校から借用した幕宮用天幕を充てた。

4 潜水基礎訓練用として呉鎮のあっせんにより、艦船用軟式潜水具五組を借用し、かつ実戦訓練用の潜水具五組と訓練用棒機雷の支給を受けた。

## 伏竜攻撃の兵器と戦法

### 1 兵器

#### ア 特殊潜水服

敵上陸用舟艇を水中にて待受けて、これと刺交える伏竜攻撃は、その特質上、所在を完全に秘とくすることがその成功の鍵であるので、呼吸を水中に

吐き出すアクアラング方式は採用できない。そのため潜水員の呼吸を空気清浄缶を通して再び呼吸として循環させ、酸素の不足は、背中に背負った高

圧酸素ボンベ(高空飛行用のものを転用)から時々補給したが、時間の経過につれて炭酸ガスがもれて服内に蓄積するのが問題であった。

### 2 戦法

ア 敵の上陸地は最大な砂浜が予想されるが、これらの海岸は一般に遠浅であり、水深五、六米程度の処に散開待機し、上陸用舟艇の頭上通過時棒機雷をもって下より突上げ、底面を破壊して接岸前に沈没させる。

イ 特攻員は、敵の上陸予想日までは、海岸両側岬角に特設された洞窟陣地に待機しており、敵の上陸予想時刻までに陣地より直接水中に開口した通路を経て所定の地点に隠密散開する。散開点は、予め水底五、六mのところ敷設しておく導索に標示しておく。

## 訓練及び精神教育

1 訓練は潜水訓練、水泳訓練、体育の三種目とし、三〇中隊を午前、午後に分け各訓練をローテーションさせた。

### 2 潜水訓練

ア 水中における自由な行動及び棒機雷操作等潜水に習熟させるため五組の軟式潜水具をフル回転させ実施した。

#### イ 特殊潜水服訓練

支給された特潜服は僅か五組であるのが悩みの種であったが、特潜服の基礎的使用、特に鼻から呼吸し口から吐く呼吸法及び酸素の補給法を重点に、短時間でも万遍なく交代体験させ効果的な訓練をはかった。

#### 3 水泳訓練

水に馴れさせかつ体力を練成する目的と万一同特潜服が充分に間に合わない場合も、遊泳特攻隊に転用可能のように、遠泳に重点を置き訓練した。

#### 4 体育

体力気力及び格闘技の練成のため、剣道銃剣術及び相撲の猛訓練をやった。

#### 5 精神教育

ア 特攻員としての信念を確立させるため精神教育を強化し、各級指揮官の精神講話を不断に実施した。

イ 特攻員となるか、或は転勤を希望するか、最終的に各員に自由に選択させ不希望者は転勤を取計った。

#### ウ 胆力練成

深夜に約一キロ離れた山上まで三十分間隔で一人ずつ出発させ、山上の壺

に名札を置いてこさせる試胆会を実施し、死を目前にひたすら敵上陸用舟艇を待受ける孤独との戦である伏竜特攻員として胆力練成を計った。

### 展開陣地視察

八十一突撃隊の展開予定地である四国高知海岸の視察を、七月下旬約一週間の日程で、部下中小隊長三名と共に実施した。当時陸軍部隊は、高知県下各地に展開し、陣地構築中であったので、これらの部隊への挨拶連絡を兼ね、伏竜隊の展開用陣地構築地点の視察を実施した。

### 伏竜特攻作戦成否についての考察

後から振り返ってみて米側の予期された上陸作戦に対して果たしていくばくの結果を挙げ得たか、疑問である。次にその理由とする数点について考察してみたい。

1 特種潜水服の性能が不十分であった。

時間の経過に伴い体内に次第に蓄積される炭酸ガスのため、五時間位が行動の限度であった。これでは水中徒歩による散開、待敵時間及び万一散開後敵の上陸が予想通り実施されなかった場合の帰還時間を考える時不十分であり、散開点までの最大距離が一〇km程

度ある場合は少なくとも一〇時間（歩行速度二・五k/h、待敵二時間の場合）程度を必要とする。

2 伏竜の存在を完全に秘とくし得たか疑問である。

もし万一敵が事前に伏竜攻撃を予期した場合に、上陸予定地点海面に爆弾爆雷を投下されたならば、伏竜隊員は直撃を受けなくても、爆発の水圧で戦死又は戦闘力の喪失状態になることは自明である。

米軍は上陸実施前に予定海面の掃海にアクアラング部隊による搜索も実施するのが通例であったので、この時に海底に敷設してある散開誘導索が発見されるか、又は散開行動中の伏竜隊員が視認される公算はあったものと考えられる。

### 3 通信連絡の困難

散開下令後の通信法は隊員による通伝という原始的な方法以外になかった。敵情の通報、敵の動静に基づく待機点の移動等機微にわたる指揮通信は不可能であった。

### 4 陣地構築上の難点

海浜両側の岬角陣地より直接水中に開口する通路を作成することは工事の困難はともかくとして可能であるが、九十九里浜のような長大な海浜では、効率的な散開待

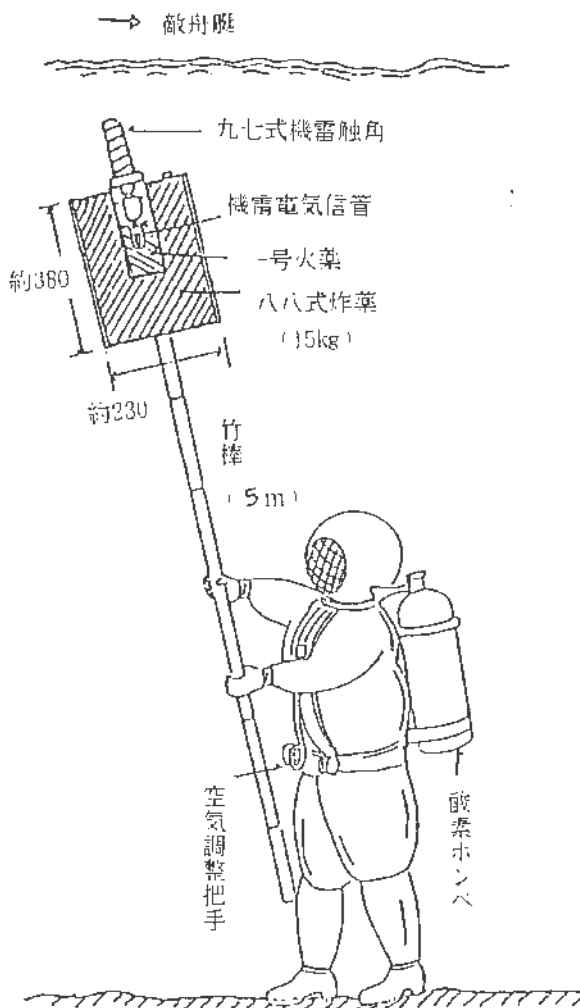
機をするためには、その中間に海側に対し完全に秘とくされた通路を作成することが必要であったが、これは工事自体も極めて困難であろうが、敵の制空権下における綿密な航空偵察下に、秘密裡に工事をするにはそれ以上に困難であったであろう。

満たすことはほとんど不可能であったろうと考えられたが、それ以上に終戦によりその作戦の成否を確認するまでに至らなかつたのはまことに幸いであつた。

伏竜は米軍の本土上陸を迎撃するた

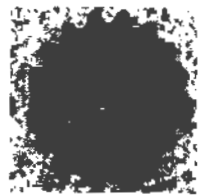
めの窮余の一策であつたが、米国B-29の焦土作戦に伴う工業力の低下により、特潜服ならびに棒機雷の製造は、予想された米軍の上陸時期に所要数を

### 伏竜隊員の待機姿勢



しかし、わが海軍が凡ゆる特攻作戦の一環として、その成否については多大の疑問はあつても、伏竜特攻をすら考察し、必死の努力をした史実を特筆して後世に残すべきものと思考する。

## イリサンの戦車特攻



本件については「戦車第十聯隊史」に詳述されているので、ここに按ずい転載させてもらうことにした。なお同聯隊史は昭和63年に発刊されたもので編集者は鹿江武平氏（特攻隊慰霊顕彰会理事）である。

弱小の我が戦車が、巨大な米軍M4戦車に対し、爆薬を前部に装着して休当たりした。これは日本陸軍戦車隊にとって初めてのことであり、またこれが最後のものとなった。

第五中隊の丹羽特攻隊は、敢然としてこれを行い成功した。他兵団の種々の部隊が入り乱れて、イリサン死守に躍起となっているとき、何処に隠れていたのか、突然敵M4に向かって突進する我が戦車。何事が起ったのかと全員が見守る中。

吹き上る火の玉、黒煙、ワァッという歓声。

万才を叫ぶ者。溢れる涙で顔をクシヤクシヤにして喜ぶ者。

「戦車特攻の勇士を助ける。」と燃え

上る戦車に向かって走り寄る盟兵団の戦友。

### 戦車特攻の背景

それはどのようにして行はれたか、日米両軍の公刊戦史を掲げるので対照していただきたい。

先ず米軍戦史「フィリピンにおける勝利」から抜粋

『林支隊は、独立混成第五八旅団の第五四四大隊、第十九師団歩兵第七五聯隊の第一大隊、独立混成第五八旅団の若干の砲兵、その他臨時歩兵大隊に改編された日本陸軍の船舶部隊からなっていた。』

六日間にわたって行われたイリサン溪谷の戦闘は、バギオに向う前進の全道程において最も重要な戦闘であることが明らかにされた。イリサン溪谷は9号道路のバウアンとバギオ間における最良の天然防禦陣地であった。しかし佐藤將軍（注・独混五八旅団長）がこれを認識したときは既に遅かった。

四月十六日、日本軍は狂気のようになって、増援部隊をイリサンに派遣し

た。バギオにある兵士で健全な者は、ことごとく前線に送られた。結局日本軍は千五百名以上をイリサンに派遣したが、実際適時に戦場に到着した兵員は、おそらく三分の一以上ではなかったであろう。』

そして続いてイリサンの要図を掲げ、細部の地形、日本軍陣地の配備状況、これに対する米軍の攻撃を長々と述べ、最後に四月十七日のことが記してある。次の通り

『十七日の朝、第一四八歩兵聯隊第二大隊の二個中隊は、中戦車、一〇五ミリ自走砲及び砲戦車支援のもと、橋梁のすぐ西の九号道の東西に走る個所に沿って攻撃したが、多大の損害を受けて撃退された。』

日本軍の対戦車砲火は、橋梁のそばの稜線の鼻を廻った所で、二両のアメリカ戦車を破壊し、一方東の稜線の西斜面からくる日本軍の正確な機関銃及び小火器の火力は、第一四八聯隊の部隊を撃退した。

交戦間、日本軍は軽戦車二両を失った。』

ここで注意すべきは、初の稜線を廻った所で、日本軍の対戦車砲によりM4二両がやられたという点である。

これは重量僅か一五トンの日本軍戦車の特攻で、重量三二トンのM4がやられ

たとは、その真実を発表できなかったからではないのか。

M4の装甲は、前面七〇ミリ、砲塔八〇ミリ、側面四〇ミリと云われ、日本軍の対戦車砲の三七ミリや四七ミリ砲では、効力は全然なかったのである。

次に「二両のアメリカ戦車を破壊し云々」とあるのは正しい。また

「日本軍は軽戦車二両を失った。」とあるが、実際には中戦車（九七式・五七ミリ短砲身・一五トン）一両、軽戦車（九五式・三七ミリ砲・七トン）一両計二両である。

次に日本側の公刊戦史を略記する。

『盟兵団（注・独立混成第五八旅団）は、三月二十七日頃ガリアノ方面が猛烈な敵の攻撃を受け始めたので、この方面が敵の主攻撃正面であると判断していた。ところがガリアノ方面は米の歩兵一個聯隊の陽動だけであって、実際の攻撃重点は、ナギリアン道のサブラン方面であったのである。』

この正面に、敵は二個聯隊即ち二九聯隊と一四八聯隊を重畳使用して四月十一日から猛攻を開始した。十五日には、バナマンガに戦車が突入してきた。

急転危殆に陥ったナギリノ道確保のため尚武派遣班長及び旭兵団（第二三師団）長は、可能なあらゆる部隊の転



用を行ったが、時既に遅く、イリサン陣地は最終的段階に至っており、今や策はなかったのである。』

これを要するに、敵はナギリン道に重点を指向し、その両側にある我が陣地に対し、先ず徹底的に砲爆撃を行く。M4の周囲は必ず歩兵が守っていて、日本軍の肉攻班がタコツボから頭を上げることができない程乱射してくる。

数少ない我が歩兵の対戦車砲があったとして、今仮にM4に対し射撃して命中したとしても、これはM4の装甲のペンキが剥げる程であって、効果はない。

かくてバギオの陥落は目前に迫った。第五中隊が特攻を命ぜられたのは、このような戦況においてであった。も早、頼みになるのは軍直轄の戦車隊だけであったのだ。

### 軍参謀の手紙

この手紙は私（鹿江）がこの戦闘について、当時軍参謀であった渡辺博氏にお尋ねしたことに對し、昭和四十二年七月に頂いた御返書である。

『二十年の一月末から二月初め頃、バギオに対する敵地上部隊の攻撃は、

主攻がベンケット道とナギリアン道の両正面から指向され、特にナギリアン道方面の敵の攻撃が進捗しておりまして。

某日（鹿江注・四月十五日）同方面（鹿江注・バナガン）の陣地が突破され、このまま放置すれば、その日の夕又は翌朝にでも敵の戦車が、バギオに突入し得る距離にまで迫りました。バギオは敵の空襲のみならず砲火にもさらされることになったのです。

その時軍司令部には山下軍司令官、武藤参謀長と作戦担当の私と、確か三人だけで、他の参謀は皆第一線部隊の指導に出払っておりました。手許には予備隊もなく、処置なしで苦慮いたしておりました。

参謀長は既に自害の決意までしておられ、私にそのことを告げられました。私としては長期持久、敵を比島に牽制抑留すべき方針の達成のため、なんとか軍司令官と参謀長を、予め計画された複廊陣地方面に後退していただきたいと思いましたが、橋梁が落とされておられ、その時補修中の状況で、この実行も難しく、たいへん困惑しておりました。

そのとき軍司令官の呼び出しがあり、決死戦車隊三両を編成し、敵の突進を阻止するよう命ぜられました。

この措置こそ、目下の危機―バギオ正面二個師団と一個旅団の将来の退却を容易にし、かつバギオにある兵站諸部隊ならびに負傷者や軍需品の後退を実施しうるため―を救う唯一の手段であることを知り、

「ハイ」と含え、勇躍して桜井中隊に向ったのであります。

当時、桜井中隊はバギオ北方のトリニダット部落の小盆地の片隅に潜んでおりました。車を飛ばして桜井中隊に辿り着き、中隊長（注・桜井隆夫大尉・五四期）に現状を述べ、決死戦車三両の編成を伝えました。

桜井君は快諾して中隊全員を集合させ、その希望を募りました。そうしたら全員が希望しますので、桜井君の指示により、少年戦車兵からなる一両と、一般からなる二両を編成したように記憶しております。

その二両を連れて軍司令部に帰り、軍司令官に報告しました。

戦車小隊員は全員が日の丸の鉢巻をキリリと締めて、恭しく軍司令官山下大将から盃を頂いております。

その二両はナギリアン道を下り、確かその翌々朝（鹿江注・四月十七日）だったと思いますが、道路の側方に隠れていて、敵戦車の進改を待ち、躍り出て体当りをくらわせ、敵戦車から逃

げ出す敵兵に短剣を擬して格闘し、敵の突進を完全に阻止しました。

お蔭で、軍司令部首脳と兵站諸部隊の後退を可能にしたばかりでなく、敵は震え上ったと見え、其の後約一週間バギオの陥落を延ばすことができたのです。』

### 友軍環視のもとで刺し違え

さて、実際の戦闘行動は、どのようなであったのか。これについて先ず平井澄雄氏（当時指揮班の人事・功績係准尉）の手記を掲載する。

『四月十五日、丹羽准尉以下十数名は、戦車服も凛々しく、山下軍司令官の前に立ち並び、悠然として恩賜の酒をいただいている。乗員の中には少年戦車兵も含まれている。弱冠十七、八歳のマメタン（少年戦車兵の愛称）は、可憐な頬を紅潮させている。暫し、別れの詔を終り、やがて出発となった。

十五日、日没近く特攻戦車二両は、中隊長以下全員に見送られ、エンジンの音も軽くバギオを出発した。

戦車は装甲板の前端の前方に爆薬を突き出した異様な姿であった。肉攻の車外員は、横腹に薄団爆雷（座布団の大きさの約四分の一）雑糞に入れてある）を抱え、腰に数発の手榴弾を下

げ、戦車の背中に跨乗している。人車とも決死体当りの姿だ。

途中の道路には友軍工兵がつくった敵戦車阻止の工事が所々にある。蝟壺には歩兵の肉攻班が待機していて彼等は戦車の出撃に勇氣百倍

「頼むぞー」と誰もが手を振って叫ぶ。

イリサン橋梁を通過後、敵前に潜み一夜を明かした。十七日朝が漸く明け始めた。車長の丹羽准尉と西曹長が敵情をつぶさに偵察すると、数百の敵歩兵が道路両側の高地を占領している。

前方道路のカーブには、M4三両が停止しているのが見える。驚くべき巨大だ。耳をすませばM4のエンジン音が聞こえる。かすかに排気ガスの煙も見える。二、三の乗員が戦車に上ったり下りたりし始めた。これは戦闘準備の真最中なのか。

我が特攻戦車は、道路屈曲部竹藪の中に隠れ、完全に偽装してある。隊員は、発進は今か今かと待機している。

その時好機到来か。丹羽隊長は西曹長に何ごとかを口早に命じ、車上の人となった。

「前へー」

第一車は軽戦車 車長 丹羽治一准尉

操縦手 平野伊孝軍曹

第二車 中戦車 車長 西 利良曹長

である。 操縦手 平野国雄軍曹

両車ともに、下り斜面の道路を、ガスを吹かして暴進した。時に敵は我に気付いて戦闘の火蓋は切られた。左右の山地脚から敵の機関銃がバリバリ撃ち出した。弾丸は跨乗の車外員に集中する。

見ると敵戦車は浮足立って動き出し、その第一車は慌てて反転を始めた。と見るや、操縦を誤ったのか、道路左側の谷地に転落して姿を消した。絶好のチャンス。

我が両車は全噴射、精力一杯、アツという瞬間M4に突入、火の玉が見えた瞬間、大爆発が起きた。彼我の戦車は濛々たる黒煙に包まれた。

路上不規則に並んでいるM4に対し、我が第一車（丹羽准尉・軽戦車）は敵の先頭車の横を通り越して、その後方のM4と、第二車（西曹長・中戦車）は先頭のM4と刺し違えたのだ。

突入の直前、跨乗の車外員は戦車の背中から飛び下り、蒲団爆雷を抱いてM4に突入した。

黒煙の中、再び爆発が起る。車外員の一人はM4のキャタピラに爆雷をかませて発火したのと同時に爆風にはね飛ばされ、崖縁に引っかけかり、今にも谷底に落ちそうになっていた。その兵

長はハッと我にかえり、崩れる崖に足を踏みしめながら目を凝らすと、敵戦

車の乗員は戦車を捨てて敵方に逃げ出した。彼が手榴弾を投げつけると二、三名が一度に倒れた。

彼我戦車は火を吹いている。我が特攻隊の乗員は全員死んだのか。しかし奇跡、見るや火を吹く戦車の前扉から

第一車の操縦手、平野伊孝軍曹が躍り出た。短剣をかざして敵中に突入したが、腹部に機関銃弾を浴び倒れた。第二車の操縦手平野国雄軍曹は、砲塔から飛び下りるや日本刀を抜き敵中に斬り込んだ。右腕に機関銃弾を受け、刀をとり落すや、これを左手に持ちかえ、敵に斬り込む姿を見せたが、その瞬間胸部に銃弾を受けその場に倒れた。

時に十七日午前九時三十分であった。 『特攻生還者の言』

さて次に、この特攻に参加して生還し得た二人の一人、道清茂氏（十五年次・軍曹）の話しを聞こう。

『四月十五日、午後八時軍司令部を

出発した丹羽准尉以下十一名の特攻隊は、暗闇のナギリアン道をイナリサンに向い進んだ。走る約一時間にして、どこかの部隊の戦闘司令所に到着

した。ここで丹羽、西の両車長は連絡のため中に入っていた。残された

我々は地形を利用して、敵砲撃に対して安全な所に戦車を入れて待機していましたが、二人はなかなか帰って来ないので、結局一夜を明かすことになってしまいました。

夜が白々と明け始めた頃からこの辺一帯に対して敵の集中砲撃が始まり、その日一日続いた。後で分ったことですが、この近くに友軍の高射砲陣地があるからだったそうです。

夕方近くになって二人が帰って来ました。そして云われるには 『敵の戦車は夜間は第一線から後方に退避しているらしい。それ故、戦車特攻は昼間にしかできない』とのことでした。

日はすっかり暮れた七時頃いよいよ出発です。砲撃の合間を縫ってイリサンに向いました。イリサンの小さな橋を渡り、川の前に出ました。戦車が渡り終ると、我が工兵がその橋を爆破してしまつたのです。

（筆者注：この爆破は敵M4戦車の進撃阻止のため）

考えて見れば、このイリサン川が生死の分れ川に変わったわけです。これが最後かと気分は弥が上にも緊張しました。

それからすぐに、橋の近くで九号道路から一寸入った所、竹藪がある小さな凹地にかくれました。敵を眼の前にして、背水の陣です。

その夜は、一晩中、戦車を偽装していました。我々が懸命に近くの木を切ってきて偽装しているとき、友軍の兵隊がどどんバギオに向って後退して行きました。

夜目に、我々の戦車服を見て、戦車特攻と感じたのか、誰もが、戦車のそばまで見に来て

「しっかり頼むぞ」と励ましてくれました。その時携帯の食糧は既に無くなっており、朝から何も食べていませんので

「何か食べ物はなにか」と聞くと、皆気前よく米、塩、携帯口糧などを、食べきれない程、置いていってくれました。

食事を腹一杯食べたのは、真夜中でした。

翌十四日夜明けとともに、戦闘準備を完了して待機しておりました。八時頃敵の銃砲火が一段と激しくなりました。七時前頃、あの巨大なM4戦車が三両、前方の曲り角に現れ、所かまわず砲、銃撃を加えてきた。特に我々が隠れている所より更に後方曲り角の小さい山(ゴブ山)に対しては激しいも

のでした。ここはゴブのように少し高くなっていたので、敵は日本軍の陣地と思つたのでしよう。これが三十分近く続きました。

私は、車外員でしたので戦車のそばで敵情を監視しておりましたところ、突然飛上るような衝撃を右膝に受けました。機関銃弾を受けたのです。丹羽隊長は直ちに他の車外員に、三角布で私の傷口の止血を命じました。

その時何故か敵M4の先頭車が、急に反転を始めたのです。

「遮蔽物をとれ」

「発進準備」

「攻撃前進」

痛みをこらえている私の耳に、矢継早に、丹羽、西両車長の声が聞こえました。

二両は私を残したまま、勇ましくガスを吹かして、敵に向い突進していききました。そして砲撃音と爆発音が激しく聞こえるばかりでした。

以上は、ほんの隙間の出来事です。

私はそれから直ぐ、誰か、一、二人の手によって後方の曲り角の壕に運ばれましたので、誠に残念ながら特攻の最後を、この目で確かめることができませんでした。

その時タコツボに入っていた歩兵隊の肉攻班から聞いた特攻隊の最後の様

子は

一、我が戦車の体当たりによってM4一両が左崖下の谷に落ちたこと

二、後の戦車から、前の扉をあけて飛び出した人は、軍刀をかざして敵に斬り込んだことの二件でした。

私は無性に喉が乾き、水を飲むため一人でイリサンの近くまで這って行きました。そこで、そこにいた他部隊の三人の兵に救出されたのです。

動けなくなった私が、まさか、バギオの本隊に生きて帰れるとは夢にも思っておりませんでした。誠に奇跡と思い、その三人の人に感謝いたしました。そして体当りを敢行して、見事に敵戦車を仕留め、帰らぬ人になった戦友の最後を細かく桜井隊長に報告することができました。

その後、私がトリニダットから担架に載せられて後方に送られるとき数人の負傷者が一緒でした。その中に中山菅雄兵長がいました。彼は今でいうショックで頭に傷らしい傷はないのですが、戦車が入入したときの様子を、

「どうしても思い出せない、しきりにこぼしていました。その後、十五キロ地点の野戦病院で皆バラバラになってしまいましたので、彼と再び会うことはできませんでした。」

道清氏の話が一段落したので、ここ

で筆者は

「M4の先頭車が急に反転を始めたのは、何故と思いませんか」と、尋ねた。

「特攻隊が隠れていた場所から敵方にかけて、道路両側には歩兵隊のタコツボが無数にありました。そのタコツボの中に肉攻兵が入っていたので、M4がこれに気付いて危険を感じ急に反転したのではないかと思います。M4の第一車は、その第二車と少し距離が離れ過ぎていて、その周辺には未だ敵の随伴歩兵がついていなかった。それで我が肉攻を恐れて、少しでも後方(M4の第二車の近く)へ下がろうとしたのでしよう。そこで我々特攻隊としては

「折角M4を目の前にして、ここで逃げられてたまるか。今だ！ それ行け！」ということだったのでした。

そして我が戦車が突然現れて突進して行ったので敵は狼狽した。そこに突込んだのです。」

道清氏の話はこれで終るが最後に「悪戦苦闘して異国の山地に散った戦友のことを思うと、断腸の思いがします。玉碎した戦友のために、なんとかこの記録をまとめて後世に残してください。御願います。」

と筆者(鹿江)に頼み、落涙暫し。

年月が経つのは早いもので、戦後三年を経た昭和五七年、私は神戸在住の藤原新吉氏（少戦一期）から一冊の本を頂いた。書名は「ルソンに生きた十七歳」。著者は中山誉雄（少戦五期）とあるのでアツと驚いた。戦後、それまで私は氏の消息を知らなかったからである。

この本の中に「M4戦車と激突」という項であり、イリサンの戦車特攻について書かれてあるので、次にそのまゝ掲載する。

『四月十六日丹羽准尉、西曹長を指揮官とする我が二両の戦車特攻隊は、ナギリアン道を数キロ西下し、イリサン橋を越えて、山際の遮蔽位置に到着した。』

私は二両目戦車の車外員として出陣、総勢一名であったが、塔乗している上官達の名は殆ど承知していなかった。

操縦手の平野軍曹が、ダイナマイトを詰めた箱を前部の中央突起部に取り付け、安全栓に結んだコードを操縦席の窓口から車内に引き込んだ。

塔乗者の顔は、誰でも硝煙でどす黒く汚れ、昂奮した両眼を狸のように見開き、言葉少なく戦友を見詰め合った。今度こそ運も奇跡もあるものではない。身体が強ばり喉が乾いた。どう

せ死ぬなら戦車兵として私も、操縦桿を握って突撃したいと思う。車外員として、装甲板の上で、もう来るか、もう来るか（敵M4と激突の瞬間が）と思う緊張の連続は嫌なものである。九時過ぎになって、我が先頭車の見張兵が砲塔に駆け上り敵戦車接近の合図をした。

「さあ、行くぞー」

私は大きく息を吸い込んだ。

そのとき敵戦車から物凄く一斉掃射が始まった。カーブの向う側でよく見えないが、道路両側のタコツボに待伏せしている我が肉攻兵を狙っているのである。そのため肉攻兵は、その殆どが肉追攻撃の機を得ないまま、その場が倒れた。

やがてM4はゆっくり前方のカーブに姿を現した。百メートル程の距離で身構えている我等の戦車と比べ、何と大きく、また格好がよいことか。敵は未だ我々の企図に気付いていない。

その時、予告なく私の乗っている戦車が突然発進した。私は車外員であるので、戦車の背中に乗り砲塔に掴まっていた。それ故、戦車内の車長や操縦手の合図など感知できない。

谷を隔てて、敵と正対するや、素早く我が砲が火を噴いた。見事M4の砲塔下部に命中した。

「やったぞー」と思ったが、煙のあとM4に何の変化も起きない。「それ、一発目を早く撃て！」とM4を見ると砲口は「ピタリ」我車に向

けられている。そのとき、我が先頭車が排煙を蹴って突進し、そのM4の左側面に激突した。瞬間ダイナマイトが爆発、彼我両軍は崖縁転落寸前で柵座した。

と同時に、二両目のW4から発射された徹甲弾は

「グワン」と、私が乗っている軽戦車の前額部を貫き、車内で内蔵弾の爆発を誘発して、車上の私は砲塔と一緒に飛ばされ、地上に転落した。考えられぬことであるが、確に砲塔がふっ飛んだという記憶がある。

どの位気を失っていたのか、どのようにして連れて来られたのか全く分らないが、気が付いてみると、私は、封鎖された幹道から谷を隔てた反対側の山腹で、他部隊の数名に収容されていた。

「オイ！ しっかりせい」と怒鳴りながら、私を励ましてくれている。私は、肩と腰の骨が折れているのか、身動きすらできない。

敵下すると幹道には一号車とM4が「人」の字になってカーブを塞ぎ、そのこちら側で、私が乗っていた二号

車、も一両のM4が刺し違えたまま全車黒煙を上げている。我々の特攻によって幹道は完全に塞がれた。カーブより向う側には、更にM4が二、三両、次に装甲車、トラックなど十数両が連なっている。米兵が沢山、付近に腰を下ろして、のんびりと煙草をふかしているのが見える。

お前は全く運のいい奴だ。燃えている戦車の傍に倒れていたが、息があったので、助けて連れて来た。撤退するぞ。早くしろ！

燃え盛る愛車を呆然と見詰めていた私は、怒鳴られるように促された。ふと見ると、私を助けてくれた数名の長は少尉であった。少尉は左足を負傷しているらしく、杖をついて立ち上った。

もしあの時私が、少尉の目に止っていなかったら、どうなっていたらうか。遺体が石ころのように転がっている特攻の前線で、他の部隊の自傷兵を救出する余裕などあり得ない筈である。情深い将校に出会うことができたのも、私の武運というべきだろう。

助けられた喜びが込みあげてきた。そして私は痛みを我慢して立ち上り、なんとなく亡き父に似た少尉の後に

従った。度重なる奇跡に対して、私はもしか



すると父の霊が護ってくれているからではないかと、初めて本気に思うようになった。

激痛に耐えながら暗闇の谷を渡り、山を越え、夜明け前、我々六名は、トリニダット農場に辿り着いた。』

以上で「ルソンに生きた十七歳」(中山善雄著)

からの拔萃を終る。

### 特攻隊の編成装備

次に道清氏によって明らかにされた特攻隊の編成装備、戦車の爆雷装着図を掲げる。

### (一) 編成

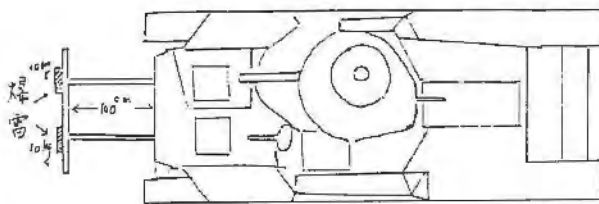
特攻隊長 准尉 丹羽治一(旧姓宮浦)  
以下 十一名

	軽戦車	中戦車
車長	准尉 丹羽治一	曹長 西 利良
操縦手	軍曹 平野伊孝	軍曹 平野国雄
砲手		軍曹 浜野音蔵
銃手	伍長 末吉清一	兵長 四方 驥
車外員	兵長 黒川利美 兵長 中山善雄	軍曹 道清 茂 兵長 田村平一

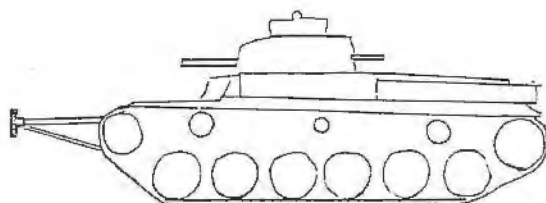
### (二) 車外員の服装

鉄兜、小銃、手榴弾数個、丸型爆雷一  
水筒、雑糞は携行せず  
食糧は一日分

上面図



側面図



戦車特攻の現地

## 陸軍水上特攻の

### 慰霊祭

陸軍の極秘部隊として活躍しながら、戦時中はその厳秘と終戦後は顧みることもしなかつた①(マルレ)②海軍の震洋に匹敵する海上挺進艇Ⅱの特攻隊員を中心とし、船舶部隊の根幹をなす船舶特幹候補生たちが結集した全国若潮会の中心的存在でもある関東支部の総会は、平成二年、二十四回を数える。九段の靖國神社に昇殿参拝を行い、戦没海没者などさきの大戦での特攻戦死者や広島の大原爆犠牲者の慰霊祭とともに、11月18日(日)に行われた。

慰霊祭には③28戦隊の小林浩三氏(士57期)の兄祥八氏、④12戦隊辻治雄氏(特幹1期生)の弟守雄氏らに、斉藤義雄顧問はじめ会員六四名が午前10時靖國神社参集殿に集合、全員昇殿のち浜野明支部長(特幹4期生)が御本殿前に進み祭文を奏上、代表五人がそろって玉串を捧げ、一同拝礼して英霊に敬意を表し、全国各地の戦友たちにかわって関東の会員たちがそれぞれそのご冥福を心からお祈りした。

式後、会場を九段会館に移し、参会者一同記念写真を撮り、ついで地階の

レストラン花で正午すぎから総会に入った。

まず三回忌を迎えた前支部長吉田浩氏(戦隊、顕彰会幹事)や元支部長永井量雄氏(特幹2期生)ら物故者への慰霊の黙禱を捧げ、定例の支部長あいさつ、定例議事を進め役員再任を承認、懇親会に移り、各期ごと、それぞれに話はずみ、懇談の輪を広げたが、軍歌『船舶隊の歌』で会をしめくり、新年への再会を約して夕暮れに散会した。 船特幹4期 伊沢辰雄



# 特攻秘話

## 全機強行着陸を命ぜられた

## 挺進飛行第二戦隊三浦中隊

(続)

挺進飛行第一戦隊 畠山卓次

### (続) 滝口氏証言の要旨

三浦中隊は前号で述べた通り、レイテ湾沿岸のドラッグ飛行場に向け、高度百五十米から降下し乍ら、敵艦隊上空すれすれに、一直線に突入しました。対空砲火は火筒のようで、全機火焰の中に包まれ、火達磨となってレイテ湾に飛び散りました。如何に混乱した状況下に在ったとは言え、現在の戦史に、間違ったことが記載されているのが残念です。

復員で名古屋に上陸した時、名簿には三浦中隊の個人名も無く、只「三浦隊十二月六日レイテ島に於て、天候不良の為山に激突全員戦死」とだけ記載されていまして、大変憤慨したことがありました。

当日の攻撃時刻の午後七時は快晴でした。深夜私が、夜光虫の光る海に浮いてい

た時は、意識朦朧乍らも、波が荒れ、雨が降っていましたが、攻撃時の快晴は間違いなく、天候不良の為山に激突などはあり得ません。落下傘部隊史その他の本にも、三浦隊全機未帰還。と只一言で片付けられておるのが残念でなりません。

三浦隊は出撃三、四時間前に、四航軍参謀から、レイテ島米軍上陸地点ドラッグ飛行場に、全機強行着陸せよ、との命令があり、特別攻撃隊としての命名式も行われ、送別の盃も頂きました。対空砲火必至の敵中への強行着陸です。帰還の望みは更々無く、それが故の特別攻撃隊です。単に全機未帰還といわれるのも、間違いではないでしょうが。

基地に於て作戦指導された方々と、現実とその作戦に参加した私の話に、喰い違いのあることも当然と思いません。然し大きな作戦をされた方々と、

その中の一部を実行し、又この目で見て来た吾々との差異も、亦あることとは思いますが、片方は残された記録で、私は現実に実行した一員として、記録はありません。只、あの壮烈というか、むしろ悲惨ともいふべき戦場の様相は、深く脳裏に刻まれております。

後で聞いた話ですが、私の少飛同期生の所属する、司値の第二十八戦隊が、戦果確認の為、当日ドラッグ、タクロバンに一機飛行したが、未帰還でしたので、翌日更に一機飛行しました。これも未帰還でした。三日目に飛行したのが同期生で、偵察の結果を「何等の痕跡なし、湾内艦船七百」と報告したそうです。彼は「滝さん、司値が高度八千米で飛んでも墜されるのに、輸送機がそんな低空で行くのは無茶だよ」と、笑っていましたが。

命令とあれば無暴とは知りつつも、進んで死地に赴く、これが吾々の任務であり、気概でした。

現在の日本は、外見から見れば平和な世の中ですが、あの美しいレイテ湾の海底には、何時の日か、行方不明などの汚名もはれて、浮かび上がれる日を待ちつつ、彼等の霊は今も愛機と共に、静かに眠っています。

十二月六日午後七時〇分、また命日

が近づきました、三浦隊長以下亡き戦友の冥福を、心からお祈り致します。  
平成元年十月十五日  
滝口 泰弘

### 滝口証言に対する考証

〔当時の挺進飛行第一隊中隊長江田岩年(53期)よりの書信の一端を照介します〕

当時の状況は「ああ純白の花負いで」で概要は記載されており、既に読まれたことと存じますが、記載されていない部分についてお知らせします。

十二月六日第一次攻撃の目標は、モ力 北ブラウエン飛行場(河合隊九機、野崎隊九機) 南ブラウエン飛行場(私の隊六機) サンパプロ飛行場(私の隊三機) ドラッグ飛行場(三浦隊七機) タクロバン飛行場(三浦隊二機)と指定され、降下作戦を指令されたと記憶しております。



三浦中隊長

当時発進基地が、私の隊は別の飛行場でしたので、三浦君と話をする機会がありませんでしたが、第一次攻撃より帰った時に、同期の大前大尉（通信班長で後にクラークで戦死）が私に、三浦君は最初から強行着陸をする覚悟で、種々の準備をして出発した。と教えてくれました。

また三浦隊は作戦時、第二戦隊長の指揮を離れて、第一戦隊に臨時配属されたように聞いて居りますので、第二戦隊の名前が出てこないのではないかと思います。

私は南ブラウエン飛行場でしたが、降下二分位前から、海上の艦船からの対空火器が、私の編隊に対しても射つて来ましたので、そちらの方を見ておりましたが、三浦隊も編隊を崩さず、丁度ドラッグ上空（上陸地点附近と見られる）で、弾幕に包まれてしまったのが見えました。丁度私も飛行場上空で、降下と対空射撃で、結果を見る余裕もなく、亦暗くなり、かつ私の飛行機も穴だらけで、漸くネグロス島に着陸できました。第一次攻撃の時の損害は、三浦隊は九機、私の隊は六機が未帰還となりました。

滝口さんでしたか、話によると、ドラッグ上陸地点上空での対空砲で、約五秒間位で蜂の巣のようになり、大半

が機上で戦死の様様だったと推定されます。（以上原文のまま）

昭和三十六年空挺戦友会発行の陸軍落下傘部隊史には、飛行戦隊の戦闘行動は、之を併記することは難しい、として、降下部隊の戦闘詳報に終始し、三浦中隊に関しては「行方不明全機未帰還」の一行にとどまっている。

田中賢一氏の著書「ああ純白の花負いて」「大空の華」「レイテに潰えた高千穂降下部隊」「英雄ここに眠る」等々にて、順を追って第二次攻撃以降のパレンシア降下作戦、バゴロド空輸作戦等にて、飛行戦隊の戦闘行動も併記されるようになりました。その一部に滝口証言が記載されたものの、タクロバン、ドラッグ西飛行場に向った部隊の大部が、果して目標に降下できたのか、強行着陸部隊は着陸できたのか、残念ながら我が軍の記録には何も残ってはいない。三浦中隊の輸送機は一機も帰って来なかったとあるが、これは当初の「落下傘部隊史」に於てすら、飛行戦隊の戦闘行動はこれを併記することは難しいとして、何等取り上げていないことと、独自の飛行戦隊史と云ったものが無かったことにもよるもので、「我が軍の記録に無い」とされるのも無理からぬものである。

次に「全部隊史」の感状集の中の九

枚を拝見すると、当初計画のドラック

二機、タクロバン二機の、飛行第七十

四、九十五の両戦隊の強行着陸隊は、

搭乗の挺進第三、第四聯隊の兵員と共

に、タクロバン飛行場強行着陸攻撃隊

となっており、当初の計画に変更の

あったことは明白である。しかも飛行

第七十四、九十五の両戦隊共に、「特

別攻撃隊」誌にも、特攻隊員としてそ

の氏名が掲載されている。然し同時進

攻の挺進飛行戦隊三浦中隊の名は、そ

の何れにもありません。後の義烈空挺

隊の壮挙にも比肩するこの強行着陸隊

が、特攻隊としても認められずにあっ

たのは、戦隊長からの上申書が提出さ

れなかったのか、四航軍の参謀が自ら

下令した強行着陸の命令を忘れたの

か？、当時の四航軍は、前記の感状を

出した直後の一月一日付を以て、第十

四方面軍の指揮下に入れられたが、四

航軍首脳部は地上軍の指揮下に入るを

心よしとせず、台湾基地使用の上申中

の一月十七日、遂に軍司令官の無断台

湾への後退となった。如何に混乱した

状況下にあったとはいえ、多くの特攻

隊員のと始末もせず、置きりにして

の戦線離脱は、非難的となるのは当然

である。その蔭にはこの様な浮ばれない数多くの英霊があったことを忘れ

てはならない。

戦隊長もまた次々の作戦で、相次く

未帰還未帰還の死闘で、その機能を失

い二十年三月中旬残る人員を整理して

内地に帰還した。其の間戦隊長の交代

があったとはいえ、事後処理をする人

間もおろなかつたのかと残念である。

タクロバンに向った滝口氏の同期生

は、小川第五飛行団長からの上申で特

攻隊として認められ、墓標まで建て替

えたとは同氏の話ですが、ここに至っ

て三浦強行着陸隊は、完全に忘れ去ら

れた存在になってしまったのである。

当時所沢の航空輸送部本部飛行隊に

所属していた私は、新任の本部長久米

閣下（前挺進練習部長）に、三宅坂の

航空本部内呼び出され、「儂しの前

任の部隊が、今比島で非常に苦戦をし

ておるので、急拠赴任をしてくれ」と

の直命で、直ちに挺進飛行第二戦隊の

後を追いつきました。時既に遅

く、総べての攻撃が終わった後にて、何

等のお役にも立てませんでした。私に

対する赴任命令がもう一カ月早けれ

ば、三浦中隊と運命を共にしたことと

思います。かねがね三浦中隊最期の真

相を知り度いと願っておりました処、

たまたま高野山の慰霊祭にて、三浦中

隊生残者の滝口氏にお会いし、同氏の

重い口から、ようやく当時の状況をお聞きし、今もレイテの海の底に眠っているという英霊の為、その浮ばれる日の一日でも早いことを願っています。総てが時既に遅しの感じですが、拙文をも顧りみず投稿しましたが、幸い田中先生のご好意にて、この「特攻」誌に掲載されましたことを感謝し。英霊よ安らかに眠れ、と願う次第です。

### その後滝口氏から受領した

#### 手紙

「特攻」十二号が発行された後の三月になり滝口氏より、今から二十七、八年前の昭和三十九年頃に「わが息子に与えるの記」として、このようなものを書きましたが、と送ってきました。これを早く送ってくれさえすれば、拙文に苦勞することは無かったのに、と思い乍らも、まだ記憶も新しい時に書かれた、生の声として、当時の心境、戦闘状況の一節を、誌面をお借りして記載します。

昭和十九年十二月六日、その日の朝、私はルソン島サンフェルナンド飛行場の宿舎の中で目を覚ました。

ふわふわと身体ごと沈んでしまいうな、スプリングベット、何年振りだ

ろうか、かえって眠りの浅かった一晩だった。外は雲一つない快晴、朝風はさわやかに窓から流れ込み、眠り足りない私の臉にも泌みこんだ。

当番兵が呼びにくる、朝風呂があるという、同じ宿舎の下士官室に泊まった同期の者と誘い合わせ、風呂をあげた。誰の胸にも一まつの重いしこりのようなものがあるのが、お互の口を重くさせていた。

風呂上りに用意された衣服は、褲から下着一切すべて純白の新品であった。私達はだまってそれを身につけ、黙々と室に戻った。

身辺の整理をせねばならぬ。身の廻りのものをバックに納め一まとめにした、手帳だの、手紙だの、財布だのを見てみると、何んとなく内地の基地を出る時、わざわざ見送りに来てくれた戦隊長が眼に浮んだ。(死ぬんじゃないぞ、任務遂行後は必ず原隊に呼び戻す、生きて帰ってくるんだ)。子供を修学旅行に出すときの、おやぢの顔そっくりだった、と思う。(いって参ります)……その言葉には、元気で帰ってきます。安心して待っていて下さい。という子供のような無邪気な心が溢れていたのだ。(注)滝口軍曹は此の作戦の為、小池曹長他一名(匿名)と共に、鈴木中隊より転属して来

た)

遣言用の封筒をひきさき、私は髪も爪も、その中には納めなかった。死ぬにはあまりにも自分が惜しかった。もっともつと飛行機に乗り、思うが儘に大空を征服したかった。しかしこの死地は、自ら進んで選んだ道である。この任務には自ら志望してやってきたのだ。悔いはない……、そう思う。

その朝になってさえ、私達はこの作戦の内容を知らされていなかった。変だな、と思い乍らも、武者ぶるいのような、覚悟の程を決め乍ら、その重くらしい雰囲気の中で、何んの実態をも掴んではいかなかったが、朝食には、とりわけて内地の香りのみずみずしい果物や、鮎などが供されたが、うまい筈の郷里の味も、何んとも味気なく、そっけなかったように覚えていた。

食後中隊長より「情況より判断して落下傘降下では不可能であり、強行着陸を決心せざるを得ない」との決意と、そうなった場合のこまごまとした指示があった。

午後になって四航軍参謀が到着した。例によって特攻隊として壮行式が挙行され、訓示があり、恩賜の酒を戴き、簡単な作戦の公表があった。ドック〇〇特別攻撃隊と命名す。参謀の最後の言葉が終った時、(これは

えらいことだぞ)と心底からそう思った。何のことは無い、私達は斬込隊を乗せて敵陣のまった中へ着陸せねばならぬのだ、敵の飛行場内でゆうゆう滑走するわけにはいかぬ、大型輸送機を夕闇の敵飛行場に、胴体着陸させるという放れ業をやるわけだ、しかもこの特攻の成否は、この着陸の成功一つにかかっている。何んともいえぬ戦慄が背筋を走った。これが武者ぶるいというやつか、と改めて覚悟が決められた。(やるぞー)と。

愛機MCは、前夜から飛行場周辺の竹藪にかくされていて、私の来るのを待っていた。既に始動のかかっている機に乗り込んだ。

臨時に切り開かれた竹藪の中を飛行場の方へ移動させて行く、竹が翼に当たって、パンパン音をたてた、地上の将校の一人が、いきなり軍刀を抜くと、何やら叫び乍ら、行く手の竹をなぎ払い始めた。露払いのようなその将校の怒った肩つきを見乍ら、やがて竹藪を出て広い空間に出た時、突然その茂みの中から一団の人影が走り出して来た。

指定の地点に停止すると、その一団は一直線に駆け寄って来て、後部の扉から飛び込むように乗り込んで来た。



画 氏勝正長谷川・理事會本

ひいて隊長機が舞い上る、一機又一機、限りなく澄み渡った紺碧の天空を、編隊を組んだ私達は、一路レイテ湾目指して飛びたったのである。

(中略)

レイテ湾は美しかった。岬の入口から湾内一面に、驚くべき数の敵の艦船が見事に停泊していた。それはみどり色の海面に、まるで一幅の絵をみるように、音もなく静止して、夢みる様に穏やかであった。一瞬友軍の艦隊を内地の軍港に見るような錯覚さえ覚える程で、それは平和な姿だった。機首を海岸線に向けてる。あざやかに視界に入る

ドラッグ飛行場。その薄暗

い薄暮の中に浮ぶ滑走路に向って、我々は着陸態勢に入った。

「〇〇〇〇以下十三名、お願いします」と、操縦室の扉を開けて、指揮官の報告があった。一人一人確認した訳では無いが、白標をかけた、選りすぐったその隊員達は、実に凛々しく若々しかった。ずっしりとした重みを乗せて扉は閉められた。

午後三時〇〇分、隊長機以下全機はすべて出発態勢に入っていた。轟音を

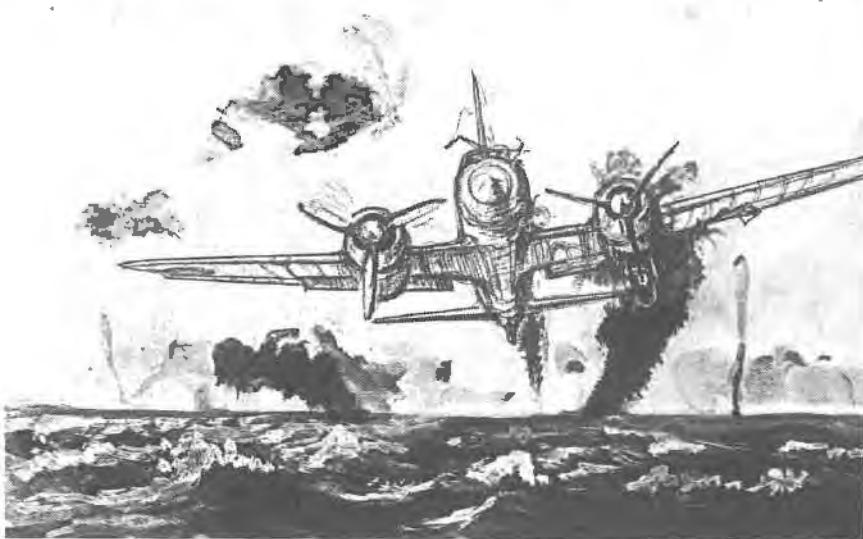
不思議な程、敵は静かである。吾々はぐんぐん高度を下げる。高度百五十米、その瞬間、ぐわっと目の前が真暗になった。右に、左に、前に、後に、炸裂する至近弾が爆風と共に破片を叩き込む、翼に、エンジン部に命中する。その一つ一つが痛い様に感じられ

た。火をふいて墜落してゆく僚機、一機……そして又一機。何発目かの一発が操縦席を貫いた、声もなく高橋少尉が倒れる。(危ない!)と、思ったが声をかける余裕は無い。機体は右左に激しく揺れ、そこそこに当る弾片は機体を穴だらけにしてしまう。(私がいられたらそれまでだ)、次の瞬間、すざましい音響と共に目の前を火が走った。思わず閉じた目を、開いたとき、私の計器類は一つ残らずふっ飛んでしまっていた。本能的に直に急降下旋回をした。低空でのこの行動は、日頃鍛えられた根性からであろうと思う。

(註) 滝口機は滑油洩れの為、途中から左エンジンは既に停止し、片発飛行をしていた)

艦船からは機体がけで、霞のような一斉射撃であった。逃れ得たのは奇跡といつて良い。氣息えんえん、全身創痕、型ばかりをとどめるにすぎぬ愛機をやつって、兎に角も一旦敵の攻撃から逃れ出ることが出来た。

ピタッと砲撃が止む。海



画 氏勝正長谷川



私は観念の目を閉ぢた。帰りの燃料は積んでこなかった。助かる道はただ一つ、ミンダナオ島に不時着する事だ

が、相談する人間は誰もいない。高橋少尉、橋本軍曹共に、すでにこときれ、後部席の斬込隊員の生きている気配は無かった。(十三名の切込隊員も一人残らず帰らぬ人となったのか!!)。行かねばならぬ、と私は思った。額より流れる血を横なぐりに拭いて、私は操縦桿を握り直した。何くそ!! と、ただそう思った。やれと命ぜられて自分はやって来たのだ。やらなくては何!! と心に叫んだ。

隊長機が岬にさしかかる。岬を越えた地点で着陸態勢に入るのだ。その一瞬が敵の恰好の餌食になる。静まり返った砲撃が、再び一斉に火を吹いた。地上からの砲撃か、前にもまして

すさまじい砲撃の中で、隊長機は、あつと云う間に炎に包まれ消えていった。続いて残る一機が岬をこえた、と思った瞬間に、再び轟音、閃光……忽ち火のかたまりは視界から消えて行った。

(さあ俺の番だ) ヨタヨタと老いぼれ牛のように、穴だらけ傷だらけの愛機は、地獄の岬に機首を向けた。岬を――またぎ……、それ敵陣だ!、そう思った途端に烈しいショックだった。

ガーンとつんざく砲火の雨、残った右エンジンも完全に停止してしまった。(これで終わりか!!)

笑いたような気持だった。死ぬんだな、と思ったが、別にこわいとも、悲しいとも感じなかった。まして基地にあつた時の様に、二十年の生涯を短いとも、惜しいとも思わなかった。ああこれで終わりだな……、過去の強い思い出だけが、走馬燈のように脳裏を走った。ガタガタと機体が失速反転する。海に落ちる一瞬まで覚えはあつた。機体が落下すると云うよりは、海そのものが、ガーンと盛り上ってくるような感じで追つて来た。その真黒な海の中に、ガブツと飲みこまれた瞬間、滝口軍曹は戦死したのである。

(生還)

気がついた時、私は海の中に浮いていた。少し離れた波間に尾翼がのぞいていた。静かな真つ暗な海上に、鬼火のように、散った油が尾翼の周囲に燃えていた。私はボンヤリとその火をみつめていた。ブスツとかすかな音を残して、その尾翼は波に沈み、火は音もなく消えたが、まだ私はボンヤリと浮いていた。と、突然、あたりが昼間のようになり、左右からサーチライトの白い光が、海上をなめるように行き交した。ハッと私は気を取り戻

した。(生きていたんだな) と、なんとなくそう思った。(さて……どうしよう)

はるかに黒々と、巨体を浮べている敵艦の影に、(こん畜生!、覚えてろ) と心の底からにくみ、ののしつた。(馬鹿野郎、今日積んでいたのが人間でなくて爆弾だったら、今頃貴様達の命は、艦もろとも吹っ飛んでいたぞ……、覚えてやがれ、こんど来る時は、誰がなんと云つても爆弾を抱いて来てやるからな!!)。帰るぞ!!、私は叫んだ。帰つて必ず出直してやる!!、泳ごうとして私は身体を動かした。だが足が動かない、動かそうとするのに、全々私の意思は足に通じないのだ。腰に手をまわして見る、破れた服の下は気味の悪い程温く、ぬるぬるしていた。相当やられているな、とは思ったが、気がたっているのか、痛みは感じない。ともかく泳ごう、どこへ?、そうだミンダナオだ、あそこには友軍の基地がある筈だ。百軒近いミンダナオ島へ、泳いで帰れると、その時はそう思い込んでいたのである。動かせる二本の腕だけで……。

(中略)

烈しい出血のために、次第に力が弱まり、吸い込まれるような睡魔との戦いにも、疲れ果てて、いつの間にか、

私は気を失ってしまった。

二度目は、カンカン照りの太陽の暑さの故か、頭がガンガンして、私はずがっていた。太陽は真上にあつて夜は明けかけていた。(ああまだ生きている)、もう泳ぐ力は無く、ただブカブカと、波間を漂い、青い大空を見上げていた。美しい、南方特有の澄み切つた大空に、キラキラと光つて飛び交う飛行機の姿が見えた。隼だ!、友軍機だ、と思つた途端に、その隼の二機を取り囲むように、何機かの敵機P38が、ひしめいている。まるで獲物にむらがる狼のように、大勢で隼をとりつつみ、上から左右から攻撃をかけている。あつという間に隼の一機は火を吹いて墜落していった。私もそのまま、又意識を失つた。

三度目に気がついた時は、もう水の中ではなかった。何かしらボンヤリと周囲が明るくなり、ぐらぐらと揺れているものが、何んとなく定まってくる、まだはつきりとしれない目の中に、好きなものが写りはじめていた。まず、人間らしきものの顔、姿、そして声、ガヤガヤと何か言っている。一オクターブ狂つたような、訳のわからない様な話し声。最初にはつきり見えたものは人間の腕だった、入墨がある、それも私の知っている日本のあの青い

入墨では無く、赤いのである。次に毛むくじらの裸の胸。三番に、のぞきこんでいる目が、どれもこれも色が変だ。と感じた時、電光のようにギョッとした。アメリカ「毛唐」、私は飛び起きようとした。だが一番近くにあった腕が、私を押しつけ、別の手が私を抱くようにしてベットに横たえた。

「NO、NO」口ばやに半裸のアメリカ兵は、私におおいかぶる様にして言った。「アナタ タスカリマシタ ダイジョウブデエス アナタタスカリマシタ シンパインイ ダイジョウブ ヨカッタデエス」納得がいかにぬ。まだ半信半疑の私に向って、二世らしき彼は、妙なアクセントの日本語で、ゼスチュアータッぷりに繰り返して繰り返しい続けた。「アナタ タスカリ マシタ アナタ タスカリ マシタ」

(その後)

墜落地点から、大分離れた洋上で、私はあれほど憎みあった米軍の、上陸用舟艇に拾いあげられ、敵の巡洋艦にうつされたのだった。脊髄をくじき、数ヶ所に弾片を受けて、死の寸前にあったという。

アメリカなればこそ、敵の一兵士に、全力で輸血などを施し、危い一命をとりとめてくれたのだった。助った

ことを今は感謝している。憎しみと感謝との入り交じった、奇妙な気持ちで、私は数ヶ月間、病院のベットで寝て過した。

生き残って敗戦後の混乱した故郷に、突然帰って来て、クロン坊が来たと思われ、駆け出して来た姉に幽霊かと思われ、腰を抜かされ、口をきわめて生身の本人たることを説明した揚句、ようやく本来の滝口泰弘に戻るこゝとが出来た。戦死の公報と私物の操縦徽章が遺品として届いていた。葬式も村をあげての盛大だったそうだし、墓標も建てていた。自らの墓前に立ち、二十年間の自分に心からの冥福を祈った。あのときミンダナオ島へ逃れていたら、或は十三名の隊員の中に、何人かは助って生を全うした人がいたのではなかったか、という疑いである。今もなお私の心の奥には、この疑いがしこりとなって残っている。だがそれはうらはらに、私は私の青春を悔いてはいない。私は第一の人生を力の限り生き抜いた。その時、その時に私は私の総べてを投じてきたのだ。息子よ、悔いなき人生を生きよ。力の限り人事を尽くせば、以て男子の一生めいすべきである。(滝口 記)

### 若潮会関東支部

#### 新年会

平成三年度の関東若潮会初会合は、新春懇親会として1月20日、九段会館三階洋間『珊瑚(さんご)の間』で開かれた。

新年の会合ということで会として靖國神社参拝は特に案内しないが、そこは戦友、各自それぞれ初詣をかねて先刻で承知とはかりに参拝を済ませて、定刻の正午までに出席予定の三三人の顔ぶれが出そろったのは、用意周到の「船舶魂」か。昨年より四人増と今回は特幹一期生の集まりが特によかつた。

前年度に引き続きの役員留任で、担当部署も手慣れ、中島事務局長の司会で開会、浜野支部長は定年退職後の再就職で第二の人生へ再スタートしたが、狭心症の疑いがあるとかで、心臓検査のため入院中で欠席、代わって特幹三期生の加藤副支部長が「歳が明けてことしはヒツジ年。この年は過去に種々事件がばっ発し、ことしもついに中東で湾岸戦争が起きた。……(中略)……とにかく、会員のみな様の健康を祈る」と開会のあいさつ。

斎藤顧問も満八十二歳と思えぬ若々

しきで、船舶兵の特攻慰霊について海上挺進戦隊の慰霊供養については、若潮会関東支部が全国の代表として春の合同慰霊祭、秋の特攻観音供養(世田谷)に地域的關係からも奉仕活動をしているが、今後も連綿と続けられるよう支部会員の不変不動の誠意に基づいて協力して欲しいと元氣にあいさつされた。

約二時間ほど昼食を摂りながらの懇談であったが、特幹二期生の今井幹事(顕彰会幹事)の音頭で船舶隊の歌「暁映ゆる瀬戸の海！」と軍歌を合唱。春三月の特攻慰霊祭での再会を約して散会したが、各期それぞれに二次・三次へと戦線を拡大しようだ。

船特幹4期伊沢辰雄

#### 会報14号の予告と

#### 投稿のお願い

次号は1月に出します。

今回は記事が多かったので32頁のものを作りました。次号も充実したものを作り度いと思えますので、各グループで特攻に因む記事を積極的に投稿して下さい。また、慰霊祭を実施したときは必ず紹介記事を出して下さい。

# 三ヶ根山比島観音に詣でて

## 特攻烈士を憶う

田 中 賢 一

攻作戦を顧みると  
き、重大な意義を  
持っている。昭和19  
年10月20日敵のレイ  
テ上陸に始る捷一号  
作戦で、初めて計画

ブラウエン突入、ついで12月6日高千  
穂部隊の空挺作戦で、タクロバンとド  
ラグに向った部隊は、共に初から収容  
の見込みのない特攻作戦だった。

う。あれから四十六年余、特攻の烈士  
は観音となって現世を見つめている。  
日本の現状は果して特攻の大精神に応  
え得る状況だらうか。

所在地 愛知県幡豆郡幡豆町東幡豆

三河湾を眼下に収める三ヶ根山頂  
に、比島方面における全戦没者を祭る  
比島観音がある。三ヶ根山は三河国定  
公園内にあつて、山頂にはこれ以外の  
多数の部隊等の慰霊碑が建っており、  
一大慰霊公園になつている。

的航空特攻作戦が開始された。即  
ち、10月20日に海軍の第一神風特別攻  
撃隊が編成され、21日、23日、25日と  
敵艦に突入した。また内地で編成され  
た陸軍の万葉隊と富嶽隊も現地に着  
してこれに続いた。

の①、海軍の震洋が初めて出撃した  
のもルソン島周辺の作戦である。特殊  
潜航艇は既にそれより前から活躍して  
いたが、この頃も亦比島全域で出撃し  
ている。

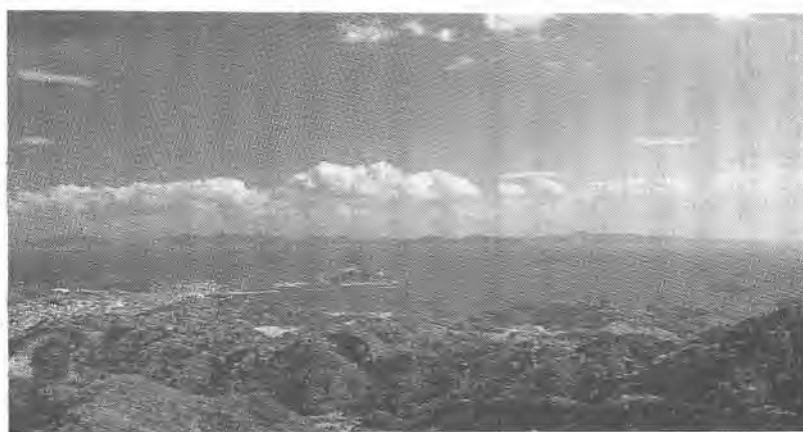
地上戦闘においては、対戦軍の特攻  
的肉迫攻撃が盛んに行はれたが、戦車  
の頭に爆雷を装着し、敵戦車に体当り  
するという戦法が、ルソン島の一場面  
で行はれた。

比島観音は勿論特攻戦没者だけを祭  
るものではないが、比島防衛作戦は特

空挺特攻が初めて行はれたのもレイ  
テ作戦である。11月26日の薫空挺隊の

比島方面における戦没者は、軍人軍  
属四七六、七七六名、一般邦人一九、  
七三七名の多数にのぼり、特攻戦没者  
だけを称揚するものではないが、この  
ような非常戦法を余儀なくされたとい  
うことで、比島方面の作戦を認識せね  
ばならない。

山頂から眺めた三河湾が、ルソン島  
のリンガエン湾によく似ており、また  
三ヶ根スカイラインが、北部ルソンの  
ベンケット道に似ていて、ここを訪れ  
る人達が、嘗ての戦場と亡き戦友を思  
出すと言はれている。



山頂より三河湾を望む

今静かに特攻観音の豊満なる容姿を  
仰ぎ見ていると、特攻烈士の大精神は  
観音様そのものであるように思う。観  
音の慈悲にすがるといふような弱さは  
ない。民族の危急を救おうとする特攻  
精神こそ、観音の慈悲の具現と言えよ  
う。そんなことで、特攻戦没者は別格  
に考えてもよいのではないかとも思

# 陸軍海上挺進戦隊の元祖

## 「大カクマ会」の発足

海挺3戦隊3中隊長

皆 本 義 博

作業、作戦海域における近距離輸送等を主とし、一部では敵潜水艦に対する爆雷攻撃等に

限られていた。これ等を背景とし、新たにしかも

とところで、鈴木船舶司令官の臨席があり、陸軍船舶部隊として、はじめて海上特攻作戦に踏み切る所以と18名に対する絶大なる期待とがのべられた。各人は、訓示終了後直ちに、高速艇に分乗し大カクマ島に移動し、世間と完全に隔絶した生活の中で訓練することとなった。

梅花馥郁と香る平成3年3月2日、

陸軍海上挺進戦隊の元祖である7名の

成・装備を案出し、作戦部隊を纏めあげることは、そのいづれを見ても容易ならざるものであって、また戦局の推移から見て、火急を要するものと考えられていた。

19年7月下旬、船舶練習部研究部長北村可大佐主宰のもとで攻撃戦法につき、研究班員も参加して検討会を実施したが、体当り攻撃か又は敵船(艦)に膚接して爆雷を投下、一旦後退のうえ更に攻撃を復行するかが討論の焦点となったが、研究班員の訓練の成果を最も尊重し、確実を期すため体当りを採ることとなった。

梅花馥郁と香る平成3年3月2日、陸軍海上挺進戦隊の元祖である7名の者が、偕行社に集合し初会合を開いた。まさに四十七年振りのことであり、その殆んどは、一別以来初めて会うものであった。

全く軌を異にする特攻攻撃の戦法、編成・装備を案出し、作戦部隊を纏めあげることは、そのいづれを見ても容易ならざるものであって、また戦局の推移から見て、火急を要するものと考えられていた。

訓練がある程度進展した頃、船舶司令部、船舶練習部と合同の戦法検討会が開かれた。訓練の終始を通じて密接に関係を保持されていた船舶練習部研究部の西浦節三中佐(陸士42期)の発想で攻撃隊の最小単位を①三隻にする方式が採りあげられ、実験の結果それが決定した。

その後班員は、それぞれ海上挺進戦隊仮編成部隊に編入され、部隊訓練の基幹となって戦法の普及練成につとめ、動員下令とともに戦地に展開した。現在兵科将校のうち生存の者は八名で、この程初会合には、その中の六名が出席した。これを機に連けいを強化し、限られた残照を益々輝かして行きたいと考えている。

この種部隊が発足するに到った経緯は、「特別攻撃隊」海上挺進戦隊の項に、発足の由来としてのべられているが、陸軍にとって、敵の大上陸作戦が近く予想されるとき、その初動を捉え、海上でしかも特攻大作戦をかけることは、陸戦に伝統をもつ陸軍にとっては、全く稀有のことであり、かつ作戦の帰趨をも制するものであるだけに、その要員の選定についての配慮は特別のものがあつた。

船舶司令部は、昭和19年7月16日、齊藤義雄少佐(陸士44期)を長とし赤松嘉次大尉(陸士53期)を副隊長として合計18名の将校(兵科将校は前記の他陸士57期3名、幹部候補生9期11名計16名、ほかに技術将校2名)を集めて、海上特攻研究班を編成し、広島湾内の大カクマ島(弁天島、当時無人島)を根拠地として攻撃戦法の検討を開始した。

18名は、宇品港の凱旋館に集合し、まづ船舶司令部の青井義治参謀から各人に対し、任務遂行の決意の有無、秘密保持の確約および本人戦死のあと。家族の生計の能否について回答を求められ、全員異議なしと文書で報告した

訓練も最盛期にかけり油が乗って来た頃、船舶司令官鈴木宗作中将は、比島方面第35軍司令官に補せられ出征することとなった。情熱を傾けて我が特攻研究班を育成されて来た軍司令官には、班員一同ただならぬ情愛を感じ、出征の見送りを考えていたが、折悪しく広島地方に空襲警報が発令され、ために齊藤隊長のみが参加した。軍司令官は、「十有八士に告ぐ、昭和豈河野通有なからん哉」と班員宛ての書を齊藤隊長に托した。奇しくも、軍司令官もレイテ作戦終了後、ミンダナオ島周辺海域で戦死されている。

当時の陸軍船舶部隊は、船舶司令官鈴木宗作中将以下約二十万の陣容を誇っていたが、それまでの船舶部隊の本来の任務は、上陸作戦における部隊・兵器・装備および戦闘補給品の揚陸

まづ船舶司令部の青井義治参謀から各人に対し、任務遂行の決意の有無、秘密保持の確約および本人戦死のあと。家族の生計の能否について回答を求められ、全員異議なしと文書で報告した

訓練も最盛期にかけり油が乗って来た頃、船舶司令官鈴木宗作中将は、比島方面第35軍司令官に補せられ出征することとなった。情熱を傾けて我が特攻研究班を育成されて来た軍司令官には、班員一同ただならぬ情愛を感じ、出征の見送りを考えていたが、折悪しく広島地方に空襲警報が発令され、ために齊藤隊長のみが参加した。軍司令官は、「十有八士に告ぐ、昭和豈河野通有なからん哉」と班員宛ての書を齊藤隊長に托した。奇しくも、軍司令官もレイテ作戦終了後、ミンダナオ島周辺海域で戦死されている。



出席者。西浦節三(船舶練習部)、齊藤義雄(第10教育隊長)、伊藤三右衛門(旧姓土門正治・25戦)、中川好延(2戦)、服部善三郎(23戦)、皆本義博(3戦)、山崎基(22戦)



# 第37回 知覧特攻基地戦没者慰霊祭



毎年5月3日に行はれているこの慰霊祭は、五月晴の好天に恵まれ、知覧特攻慰霊顕彰会（会長は知覧町長）主催で、本年も盛大に行はれた。町の担当者の談によれば本日の来訪者は一、二〇〇人を越すというが、その大半の人が慰霊祭に参列し、観音堂を包み込むように建てられた超大型天幕は、参会者で溢れた。

霊前に並ぶ献花の名札でも判る通り、参会者は偕行会員、陸士57期生会、特操会、少飛会、乗員養成所の会などに属する会員とその御遺族であり、それらの会の代表者は町長等の追悼の辞に続いて、交々霊前に進み出て慰霊の言葉を捧げた。特攻隊慰霊顕彰会では、竹田会長の追悼の言葉を最上副理事長が代読した。

それら慰霊追悼の辞は、追慕の情溢れるものであったが、陸士57期生代表の捧げたものの一節に言う「あなた方も人の子なれば、愛

する父母兄弟姉妹、あるいは妻子に思いをはせるとき、生と死のはざまの中で苦悩なされたことでしょう。しかし一たび機上の人となるや、只々与えられた使命と任務のため翻然としてすべての悩みを断ち切り、崇高なる悟道の心境に近づかれたでありましょう」と真情迫るものがあった。

会員の焼香、更に全員の献花の列は長々と続き、一時間半に及ぶ慰霊祭の最後は、「同期の桜」の大合唱によって幕を閉じたが、この地を飛び立った同僚を憶い胸迫り、拳で涙を拭う者も見られた。山梨県から杖をつき参会した第110振武隊のある特操出身者は、5月26日離陸に際し爆弾痕に脚を取られて三式戦が転覆し、重傷を負ったので今日があると語った。

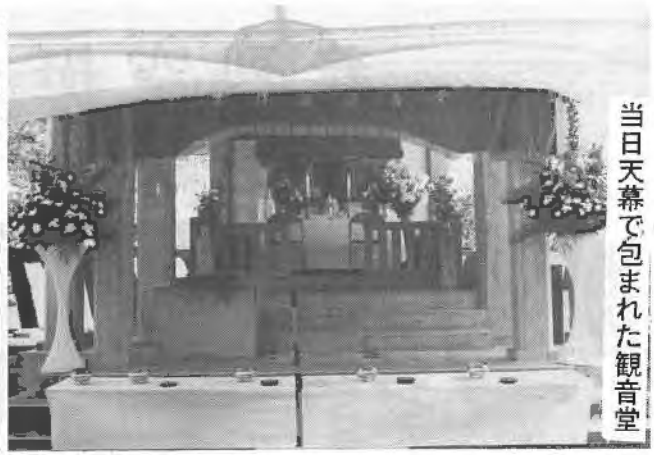
かつて富屋食堂を経営し、特攻隊員の母と言われた鳥浜とめさんが、車椅子に乗って参列し、焼香と献花をする姿は人目を引いた。







通常  
の  
観  
音  
堂



当日  
天  
幕  
で  
包  
ま  
れ  
た  
観  
音  
堂

噫々 知覧特攻隊

国難迫る沖繩に

悲報は櫛の齒を引きて

狂乱既倒必殺の

夷狄に加えん鉄槌を

嵐に散るや桜花

我が選びたる道なれや

夕陽沈む五月空

臉に浮ぶ故郷の

尽きぬ思いを断ち切りて

身辺清し一封に

万斛の情折り込みて

言ひ残すこと既になし

黒潮洗う薩南の

緑滴るこの大地

祖霊まします大八州

愛しき人よ同胞よ

双肩に負い我は征く

さらば幸あれいざさらば

御霊に捧く一輪の

菊花に寄せる我が念い

「同期の桜」高誦して

遙かな空に雲流れ

頬に伝はる涙あり

噫々 知覧特攻隊



# 義烈空挺隊慰靈際

5月26日

沖繩摩文仁台上



主碑の文字は、奥山隊長の書き残した筆跡を拡大して刻んだ。主碑の石材は、発進飛行場健軍の西にある金峯山から切出したものである。離陸してこの山の上を飛んだのが、祖国の見納めとなったという縁による。



空挺同志会沖繩支部が主催し、毎年

義烈空挺隊が沖繩に突入した5月24日に最も近い日曜日に、慰靈祭を行っている。沖繩支部の構成員は以前習志野の空挺部隊に所属したが、現在は沖繩の自衛隊に勤務している現職自衛官であり、先任者は支部長となっている。

本年の慰靈祭は、支部員20名と県外から参加した民間の会員及び習志野の空挺隊員を加え、更に沖繩自衛隊の音楽隊の支援を得て盛大に行われた。

当日全日本空挺同志会倉重会長の捧げた祭文は、会員の気持をよく現しているので、その要点を紹介する。

「砲煙渦巻く山野も 閃光きらめく海原も今はなく、瀟洒な沖繩空港や高層建築の建ち並ぶ那覇の街を見ますと、四十六年の時の流れを痛感致します。戦後私共は懸命になって働き、英霊の御加護のもと祖国に今日の繁栄をもたらしました。しかし、我共の働きなど祖国のため一命を擲られた英霊の方々の勲の足もとにも及びません。私共は国の繁栄の恵を最高度に享受し、平穩に暮しておりますが、これ偏に英霊の方々の遺産であることを信じて疑いません。」

日本国の安泰と繁栄を不動のものにするため、義烈の大精神を今後の若い人達に確かと植付けねばなりません。そのような使命を我が空挺同志会は背負っております。今この祭祀を執り行っているのはすべて戦後に育った人達であることをここに報告申し上げます。……………」

義烈空挺隊が突入した読谷飛行場跡は、米軍の演習場ということになっているが、現実には黙認の耕作地である。「義烈空挺隊玉砕の地」という木柱を建ててあり、例年当日午前一同ここに詣る。

